371
Ko75
4

民主教育の本質

文學博士
小西重直著

東京都・永澤金港堂發行

0042019000

0042019-000

371－Ko75－4ウ

民主教育の本質

小西重直・著

永沢金港堂

昭和22

AHB

371
K075
4

文學博士 小西重直 著

民主教育の本質

永澤金港堂

259
904

序

私は昭和五年拙著「教育の本質觀」（玉川學園出版）に於て、教育其のものの本質についての卑見を公にした。新日本建設のための新教育は、その根本精神に關して、本書に於ける私の研究と一致する所が多いのである。今度の著述「民主教育の本質」は「教育の本質觀」の自由なる敷衍であり延長でありまた發展である。文化國家、平和國家の建設によりて世界の文化に寄與し、世界の平和を促進すべき新日本の使命達成に力めつゝある人により高敎批正を仰ぐことが出來ればまことに幸である。

昭和二十一年十月

著者識るす

民主教育の本質

目次

第一章　人間性の本質……一
一　宇宙萬物の眞實的樣相……一
二　人間の眞實性と民主社會……二
第二章　敬としての眞實性……七
一、敬の融通無碍と義の實踐……七
二　敬と知情意と文化……一〇
三　敬の程度と對象――自重と人格の平等……一四
第三章　愛としての眞實性……一九
一　中根東里の愛の哲學――民主社會と愛……一九

目次

二　愛は知を生む――母性愛と人類愛……二三
三　文化熱愛の精神……二七
四　ペスタロッチーの人間愛……二九
五　ペスタロッチーと米國の教育……四三
六　愛は教育の方法を生む……四七

第四章　信としての眞實性……五三
一　信は守るといふこと……五三
二　論語三言――公民教育の根本精神……五三
三　民主社會と信……五七
四　信念、信仰、自信、內面の秩序……五八
五　師弟の間の信……五九

第五章　行としての眞實性……六七

一　物心一如としての人間文化……六七
二　勞作と教養……七二
三　民主社會と勞作……七三

第六章　敬、愛、信、行相互の關係……七五
一　中江藤樹の敬愛と民主社會……七五
二　信は治國の大本……七七

第七章　敬虔の精神……八〇
一　廣瀨淡窓の敬天哲學と其の實踐……八〇
二　上杉鷹山の敬虔の精神……八九
三　文化人と敬虔の精神……九六
四　ペスタロッチーの人間愛と敬虔精神……一〇三
五　ペスタロッチーの宗教教育……一〇七

六　學校に於ける敬虔心の涵養……一二四
第八章　自然と文化……一二八
一　自然の文化的意味付……一二八
二　必然と自由。有限と無限……一三三
三　文化と合理性の教育……一三四
第九章　科學技術の教育……一三七
一　モスレーと米國の技術教育調査……一三七
二　デューイ教授と創造的勞作教育……一三〇
三　民主的人格と科學技術……一三三
四　工作教授の刷新……一三八
第十章　農耕的勤勞の教育……一四〇
一　平和教育と農耕……一四〇
二　尊德翁の「至誠と實行」……一四四
三　全人的教養と生産……一四八
第十一章　消費の學校より生産勤勞の學校へ……一五一
一　民主社會と學校の自營……一五一
二　生産勤勞精神の確立……一五三
第十二章　自發心と興味……一五六
一　神の聲としての自發心……一五六
二　靈肉一元としての自發心……一五八
三　社會教育と國民の自發心……一六〇
四　興味と合自然的教育……一六一
第十三章　個性の教育……一六七
一　個性と眞實性……一六七

二　平洲、及淡窓の個性教育……一六九
三　個性の類型……一七三
四　敬、愛、信、行と個性……一七四
五　學校に於ける個性教育……一七六
第十四章　民主社會と自律的生活……一七九
一　衝動的生活……一七九
二　感性的生活……一八三
三　解放的自主的生活……一八七
四　自律的生活……一九一
五　自由と責任……一九四
六　社會及文化發展の行程……一九五
七　結　語……（終）一九七

民主教育の本質

第一章　人間性の本質

一、宇宙萬物の眞實的樣相

大宇宙に於ける幾億の天體は實に精密に正しく運行する。これは意圖的ではない、意識的ではない、自然的である。自然の法則に從つて正しく運行せねばならぬような必然である。禽獸の行動は多くは生得的の本能である。主として其の生命を維持し、其の種族の保存のために正しく行動する。又其の或るものは人に飼育されては、人のために正しく奉仕する。本能は固定的なもので、發展的ではない、今日の蜂

の巣の構造も、一千年前のものも變りがない。彼等の本能的行動は人間に對して有害なることもあるが、彼等にとりては自然に惠まれたる已むに已まれぬ必然的の正當の行動である。

草木、野菜等にあつては、初めから自發的に自然に發生するものと、受働的に人によりて種子として蒔かれるものもあるが、何れの場合に於ても、一旦發芽して適當に栽培されれば、夫れに應じて自發的に能動的に已むに已まれぬ必然として自己の固有の本質を正しく伸長する。

二、人間の眞實性と民主社會

人間にも、自己保存や、種族存續などの本能があるが、人間には、本能以外に知情意の色々の複雜な精神作用がある。これは非常に高度に發達し文化を創造し得る可能性があるが、また動もすれば不正邪道に走ることもある。こゝに人間には教養が必要となるのである。併し人間の精神は本來は已むに已まれぬ自發的な態度を以て正しく働く所に安定と滿足とを感ずる。人間も天地の間に生れ萬物の靈長たる以上は、天地間の理法としての正しい道に自發的に一致すべきが本來の本質である。

宇宙間の萬物は其の本性に於ては、實に已むに已まれぬ自發的な樣相と態度を以て正しく運動し、正しく行動し、正しく伸長し、正しく作用し、正しきものを要求し、正しきものを實現しなければ滿足しない。萬物の本性は實に眞實性といふべきものである。

この眞實性の根源は何んであるか。それは絶對者に歸するより外はない。

眞實性は物の物たる所以であり、人の人たる所以である。凡べてが

理法に卽して自己固有の可能性を具現する所に其のものゝ正しさがあるのである。其のものゝ眞實性が見られるのである。翼をもつ鳥は必ず空中を飛び廻る。鰭をもつ魚は必ず水中を游泳する。絶對者より神性として與へられたる眞實性をもつ人間は必ず人間たる本質を具現せねばならない。さうでなければ、翼のない鳥や鰭のない魚のやうなものである。併しこれ等の鳥や魚は格別他に害を及ぼさないが、人間が人間たる所以を具現しないならば、人間としての資格である人格を失ひ、社會の厄介者になるより外はない。

人間の精神は、譬へて言ふならば、一種の層をなして居る。表面の層は知情意の色々の表現であり、其の下の層は知情意の活躍して居る場所であり、更らに其の奥には知情意の働きを統一して、自分のものとする働きがある。卽ち我といふ牙城である。この城の本丸が卽ち眞實性である。この性を充實し發展せしむることによりてわれわれは天地萬物と相交流し、絶對者に親しみ、人間社會に何物かを貢献することが出來るのである。萬一この本丸を喪失するならば人間界の敗者となるより外はない。われわれは出來るだけ眞實性をはぐくまねばならない。眞實性は本來は自發的なものであり、已むに已まれぬ積極的なものであり情緒や感性的のものを淨化し若くは統制して、常に正しさを要求し、眞理を究明し、また正しいことを默視しては居れず、出來るだけこれを實行實踐に移し、眞實性の具體的な姿を、卽ち眞實性が自分自身の生きた姿を見ようとするものである。これによりて反省し創造して益々自己の充實、自己の發展に精進する。而も自他の眞實性其のものは人格の尊嚴平等の根源であり、人間性の本質を共有する凡べての人格は同胞相愛の親しさを以て、御互の行動に於て、進んで提携し

協力し奉仕援助を捧ぐべきである。討論、論議も必要ではあるが、相互の眞實性が接觸し眞理を共認共感すれば理解が成立して美しい和親協同の世界が現はれねばならない。眞實性の充實發展が客觀的に顯現する所に自由明朗な民主社會が誕生し、また育だつて行くのであり、民主社會の發展によりて眞實性も發展する。眞實性の充實發展は實に個人の完成卽社會の完成となり、民主社會の發展は社會の完成卽個人の完成となり、こゝに文化國家は興隆し、世界人類の福祉は增進する。

第二章　敬としての眞實性

一、敬の融通無碍と義の實踐

眞實性が充實し發展するには、眞實性の自己創造としての精神力が必要である。其の基本的なものは敬と愛と信とであり、これ等の具體相としての行である。これは私の多年の持論である。これ等の教養に於て優れるものは人の師となり、幼稚なるものは其の教を受けて自己の眞實性に培ふ所に教育が成立するのである。

敬は眞實性の作用である。正しさを求むる眞實性は敬の作用として自己を顯現する。これによりて眞實性自體が充實し發展するのである。

齊整嚴肅といふ態度は敬の一つの特色である。朱子は敬は主一無適と說いた。一といふことは淺見絅齋の說のやうに、一事一件といふ意味ではなく、全局といふ意味に解すればよいと思ふ。一事一件のみを主とするならば、其のことに捉はれて全局が分らない。これは眞の敬ではない。無適はユクナシであつてふら〳〵散慢放心しないことである。心が物事の全局に亘り、全局に通じ、融通無碍、大地盤に立ちて、眞面目な恭謙な確實さを示すことが敬の一つの特色である。

敬の第二の特色は、實行實踐に移ることである。易の文言傳に敬以直內、義以方外といふ句がある。これについて山崎闇齋や其の他の人の敬義內外說に關する研究もあるが、直內といふやうに、自分の精神內面や自己一身に關しての居敬的修養が必要であり、これが敬には欠くことが出來ないものである。併しこれだけに止まるならば眞の敬ではない。義以方外といふやうに、正しい事を實行に移し、人類や國家社會を立派にするやうに活動せねばならない。眞の敬は活敬でなければならぬのである。敬的な教養のある人は筋道を正しくするものである。秩序を重んずるものである。社會の禮節を實行するものである。これ皆廣い意味の義である。義は斷制裁割道理に叶ふことを公明正大に實踐することである。卽ち義は宜である。而もまた自分の利害を顧みずして人道のため社會のために盡くすことである。これはそれ〳〵條理筋道を守るものである。

二宮翁夜話の中に、禮法は人界の筋道である。人界に筋道のあるは、譬へば、碁盤、將棋盤に筋のある如きである。人は人界に立てた筋道によらねば、人の道は立たず。碁も將棋も、其の盤面の筋道によればこそ、其の術も行はれ、勝敗もつくものである。此の筋道によらねば、小兒の

碁將棋を弄ぶが如く、碁も碁にならず、將棋も將棋にならぬ。故に人は禮法を學ぶべきであるといふ貴い諭しがある。禮法は敬と義とが一元となつて、社會の秩序を維持し人間の品位を保つために出來たものであるが、碁盤や將棋盤の筋道に譬へたのは如何にも卑近で面白い。碁盤の筋道を歩くことは禮節のみではない。これは義一般の特質である。義は實に人の踏むべき公正な大路である。草藪の中に迷ひ込むことは義ではない。情實を排して正しい筋道を實行することが、義の義たる所以である。敬の教養は斯樣な義の實行にまで高められ敬義一元とならねばならない。

二、敬と知情意と文化

眞實性は知情意の根源であり、知情意は本來眞實性的のものであらねばならぬのである。併し、動もすれば眞の本來性をはなれ不正放心に走るのであるから、これを眞實的になるやうに培はねばならない。

眞實性は其の敬的な作用によつて、知を覺醒し、知を正しく振起する。情に正しい軌道を與へる。意思の正しい方向と實行上の强さに培ふものである。これがまた眞實性自體の充實發展となるのである。

子供が四五歳になれば、これは何にか、これはどうしたのか、これは何處より來たか、などと日常耳目に觸れる色々の事物について問を發する。これは瞬間的ではあるが、事物に對してこれを粗末に看過しないといふ眞面目な敬的の態度を示すものであり、問題把握といふ知的研究の著しい表現である。我々が心靜かに事物について考ふる時は、心の眞面目さであつて敬の精神の籠つて居る場合である。學者が學問を研究する時には先づ以て問題を把握せねばならぬが、心が放心の狀

態にある場合には問題となるべきものをも見逃がしてしまふ。專念に研究を續けて行く狀態には多分に敬の精神が流れて居るのである。敬は實に知的創造の母である。

敬の精神は人間の情操を崇高にする。情操には眞理愛好の知的情操があり、道義實踐の道義的情操があり、審美生活の根源たる美的情操があり、絶對者に對する宗教的情操など色々な情操があるのであるが、此の情操の中に敬的な精神が溶け込むと、氣品の高い崇高な味が出て來る。敬的な知的情操の豐かな人は、事物の條理を徹底的に研究せねば滿足しない。此の點に於て犯すことの出來ない品位を示すものである。敬的な道義的情操に富むものは、節義節操を堅持し、廉恥の心に篤く、謙虛恭遜自他の人格を尊重し、社會の秩序を重んじ、世界人類に正しい平和を招來しようとする情念に篤いものである。敬的な美的情操の敎養あるものは、崇高なる美の創作や鑑賞を愛好する。美には優雅の美や、滑稽の美や、壯美や、悲劇の美など色々の種類があるが、敬的な美的情操に富むものは壯美や悲劇の美を愛好する傾向を有するやうに思はれる。敬的な宗教的情操に篤いものは少くとも絶對者の森嚴性を畏敬し、天命神意を遵奉し實踐する努力型の人である。

意思に對する敬の作用は如何なるものであるか。敬其のものは、放心怠慢に陷らず、事物の全局に亘り、齊整嚴肅で、融通無碍であると共に義としての實行實踐にまで進み得るのであるから、其處には知性的な要素もあれば、意思的な要素を多分に具有してゐる。意思の正しい方向、其の決定力、其の正しい實行力などが、敬の精神によりて嚴肅莊重に力强くなることが出來るのである。

敬の精神は、心理上の知情意の正しい働きに必要であるのみではな

い。一般の文化、經濟の方面に於ても、人間の一切の價値ある生活を建設する場合には、必ず或る程度までの敬の精神を必要とするのである。

文化はわれわれの精神が物や人に生きることである。人や物を粗末にしては精神が人や物に通はない。人や物を粗末にしないといふ敬の作用なくしては文化は生れることは出來ない。價値といふものは起り得ないのである。

三、敬の程度と對象——自重と人格の平等

敬の程度には色々ある。畏敬は敬の最も嚴肅なるものである。心身共に緊張するが畏は恐怖とは異る。恐怖の場合は心が萎縮するが畏敬の場合は神に對する場合のやうに、心が神に通じてむしろ精神の開展擴大を感ずるのである。至敬は融けて大和となるといふやうに、神の至愛に感じて畏敬が親愛となることが出來る

非常に貴いものに對してはこれを尊崇し、立派な價値をもつものに對してはこれを尊重し、敬重する。廣く凡べてのものを粗末に取り扱はないといふことは敬の働きである。時間を浪費せず、時間を正確に守るといふやうなことも時間を粗末にしないので、時間に對する一種の敬である。

敬の對象について言ふならば、苟くも價値あるものは皆悉く或る程度の敬の對象となることが出來る。次ぎに先づ、自他敬重について說いて見よう。

未だ自覺のない幼兒にあつては自己敬重卽ち自重の態度は稀薄であるが、併し譯もなしに濫りに小言を言はれ叱責を受くる場合は、彼等

は非常に不滿を感ずる。これは彼等の自重心が傷けられたからである。幼兒にありても消極的には自重心を感ずるものである。自分といふことについて或る程度の自覺が起れば、自然に自重心も高まつて來る。人間の本性は眞實性であつて、絶對者の分身であり、社會に奉仕し、文化を創造する原動力をもち、これに培ひ得る力をもつ以上は、われわれはわれわれの神性である眞實性に對して、これを粗末にしてはならない。これを粗末にすることは絶對者を粗末にし、文化を粗末にし、社會人類を粗末にすることになる。自重心は動もすれば、獨善に陷り、倨傲尊大となることがあるが、これは已に敬の範圍を脱して自負や傲慢誇張の邪道に墮したものである。

櫻の花に見とれて、花卽ち我、我卽ち花の境地にある時が眞實の美的鑑賞であるが、これを一枝折り取りたいといふ心が起れば、其の瞬間に美的心境は私欲と化するのである。自重が正しいものであれば、自己敬養の必要上、謙虛恭遜の心情が起らねばならない。それが若し倨傲尊大や獨善に陷るならば、丁度美の境地から私欲の邪道へ轉落するやうなものである。殊に自重は獨り自分のみの問題ではない。各人は皆眞實性を中核とする人格の持主であり、此の點に於て、各人は平等である。カントが、人格は目的的であつて、これを手段にすべきではないと言つたことは至言である。我々は人の人格を手段として使役してはならない。神性を有する人格を手段とするならば、それは絶對者を汚すことにもなる。人格の平等を認め人の自重の貴いことをも認むるならば、獨善や倨傲、尊大の弊に陷ることはない。社會の各人は、人の人格に對して敬意を捧げ、相互の人格を敬重し、謙虛、恭遜の態度を以て、正しい自重の態度を以て各自の眞實性を發揮し、またその敎養に力む

べきである。各人相互に親愛の情に於て結合することが望ましいのであるが、人には親疎の別もあり、一概に直ちに親しみ愛せよと言つても無理である。併し人格の平等を認め、相互にこれを敬重することは難事ではない。民主新日本の社會に於ては先づ以て人格相互の敬重、尊重を實行に移さねばならない。そこには社會生活の禮節も自然に行はれ、そこに社會の秩序も維持され、人の品位も保たれ、そこに世界平和への基本生活も成立するのである。

第三章　愛としての眞實性

一、中根東里の愛の哲學——民主社會と愛

中根東里は元祿七年卽ち今から二百五十二年前に生れ、明和二年卽ち百八十一年前に、七十一歲で亡くなつた陽明學者である。先生は非常に慈愛心に富み、一時弟の幼兒芳子を養育し、敎育上立派な文獻を殘して居る。

先生の陽明學の根本は良知の本體は天地萬物唯だ一身なりといふ愛の哲學である。

先生の學說の一端は次の通りである。

天地は萬物の父母で、萬物は天地の子である。子と父母とは一體で

ある。天地萬物は唯だ一身である。人は天地の心で、天地は人の身である。身と心とは一體である。萬物が區々に別々になつて居るのは丁度一身の中に於て、耳目、口鼻、首足、肩背などが各其の分をもつて居るやうなものである。或は貴くして上にあり、或は賤くして下にあり、或は遠く、或は近く、或は大または小、それ〴〵差等節目がある。併し精神は全身を周流し、脉絡貫通し、疾痛、歡樂、感觸、皆相應ずるものである。この故に上なるものは下を愛し、下なるものは上を敬し、遠きを忘れず、近きを忽にせず、大に事へ小を勞ひ、相助け、相安んじ、樂むに天下を以てし、憂ふるに天下を以てす、これが聖人の治體である。一體の中に居りながら、各自が差別相に立ち、各其の藩籬を高くすることは萬物一體の實相に反するものである。若しこゝに止まるならば、人は唯だ一團の血肉のみであつて、天地の心となることが出來ない。天地萬物と渾然唯だ一人である。陰陽は其の呼吸で、四時の變化は其の屈伸のやうなものである。各自の分野は表面上のことであつて、其の實體に於ては全體は皆均等である。

先生の哲學は斯樣な愛の哲學である。敬は萬物の差別相に基づく。敬せられるものと敬するものゝ間に距離が豫想される。併し敬の極致に於ては兩者は溶けて大和となることが出來る。至敬は至愛となることが出來る。敬は差別相に出發して平等一體となることが出來る。結局は敬も愛も其の母體は人間の眞實性であり、一體二相、二相一體であるからである。愛は主客一體、自他一體、萬物一體、宇宙卽ち我であり、我卽ち宇宙である。故に人の悲憂は自分の悲憂であり、人の喜悅は自分の喜悅である。愛は實に萬物の平等相に基づくのである。

、民主社會に於ては、互に相愛親和の誠を致さねばならない。親子夫

婦間の愛は隣人愛に擴がり、更に社會愛に發展し、進んで人類愛に徹せねばならない。愛のない社會は砂漠である。一ッ〳〵の砂粒の間には何等の結合もなく、潤のない砂漠である。綠地の草木も水もない砂漠である。人は愛のない所には住むことは不可能である。愛は實に生命の泉である。

併し、人間の間には、また萬物の間には、自ら親疎の別があることは自然である。親の子に對する愛は無限である。多數の子供に對して公平に愛を注ぎ、而もそれは無限である。如何に多く熱愛しても愛の源は枯れることがない。却つて、愛は愛することによりて益〻其の源が深められる。併し社會一般の人々に對して我が子を愛するやうに愛することは普通の人には困難である。親疎によつて愛の注ぎ方にも自然に差別が起つて來る。萬物一體觀と雖も現實の事實に於ては程度上の差別を認めざるを得ないのである。愛を深く篤く注ぎ兼ねる場合には、少くともこれに對して人格平等の立場から、敬の精神を注いでこれを敬重し尊重せねばならない。これは決して困難なことではない。民主社會に於ては必ずこれを實行に移さねばならない。而も敬は愛にまで深められることが出來るのである。深めることに力めるのは民主的社會人の最も美しい姿である。包容、奉仕、博愛の美德は世界平和の鍵である。

二、愛は知を生む——母性愛と人類愛

愛は知を生む。愛は人や物と一體になるのであるから、愛するものは愛せられるものゝ內面と溶け合ふのである。故に愛せられるものの本質を其の內面から體認することが出來る。隨つて如何にすれば

其の眞のが發展して、本質を發揮し得るかといふ實狀を了得することが出來る。親は子を愛するから、子の立場に卽して子を育だて上げる方法を考へる。學者は學問を愛するから、事物の本性に卽して事物の眞相、眞理を研究することが出來る。苟くも自分の仕事を愛し、それと一體になるならば、仕事が立派に出來上るのである。愛するものは愛せられるものゝ本質に卽して其の發展發育の可能性を伸長しようとするものである。本質に卽するといふことは其のものと一體にならなければ困難なことである。斯くして愛は價値を創造し、文化を創造し、またこれをはぐくみて發展せしむる力である。愛なくしては創造發展は不可能である。愛は知を生むといふ涙ぐましい例がある。それは日露戰爭當時の一兵士と其の母親との間に起れる哀話である。

金澤師團に屬する一兵士は戰場に於て重傷を負ひ眼は盲となり、耳は聾となつた。生命も危險である程の重態である。斯かる場合に母を慕ふのは人情の自然である。故郷には唯一人の老いたる母親が其の子の安否を氣遣つて居る。兵士は上官の厚意により、金澤に後送された。田舍に居る母親は遙に金澤へ出て來て、子供の病室に入つたが、子供は目が見えず、耳は聞こえない。母親は其の子の手を握つて母が來たぞと繰り返しても子供にはそれが母であることが分らない。母親は泣く、軍醫も看護婦も皆泣くばかりで、母親であるといふことを知らせる方法がない。すると母はじり〳〵と其の子の寢臺にすりよつた。懷を開き、乳房を出して、子供の口に銜へさせた。其の瞬間に負傷兵は手を擴げて、老母を我が胸にひきよせた。老母も思はず子供に抱きついた。「あゝ、お母さんか、あひたかつた、あひたかつた」「分つたか、分つたか、母も逢ひたかつた」これが親子の最後の會話であつた。負傷

兵は其の後僅かに三分間で絶命してしまつた。(村上寛氏著母ごころ)

乳房を出して口に喰へしめた、あゝこの聖なる知恵、其の子を愛する母親の至愛は實に人間の眞實性其のものである。絶對者の心其のものである。至愛は實に聖知の母である。

純なる愛は自己の全體を對者に沒入して自他一如となるので、第三者の介入を要求しない。子を愛する母親は幼兒が目を覺ませば母親自ら衣服を着せてやる。洗面の世話もしてやる。母親自ら食事の用意もしてやる。學校へ通學する子供の辨當は母親の手になるものと女中の手によるものとで、其の味が違ふのは自然である。愛の籠れる馬鈴薯の一片は、愛なき玉子の料理よりも滋味に富んでゐる。多くの場合に於て冷嚴は冷嚴を生み、慈愛は慈愛を生む。冷嚴的に躾けられたるものは多くの場合、人に對しても冷嚴的になり易い。慈愛の中に育だちたるものは多くは人にも慈愛を施すやうになる。親が長男の頭をはれば、長男は其の弟の頭をはることを覺える。幼兒は親殊に母親の愛するものを愛し、母親の敬ふものを敬ひ、母親の信ずるものを信ずる。心の作用は一所に止まるものではない。常に流れ行くものである。親子の間の慈愛は、社會に流れて人間愛となり、更に世界に流れて人類愛となり、世界平和への推進力となる。

三、文化熱愛の精神

文化國家を建設すべき使命を有するものは、文化熱愛の精神に篤くなければならない。文化の一つの相である藝術や、學問の世界などには藝術や學問の熱愛の逸話が傳へられて居る。池野大雅堂は渾身藝術其のもので、生涯清貧に甘んじた。或る時大阪の大和屋といふ商店

まり、店の暖簾に大和屋の三字を書くことを頼まれた。彼は大和の二字を書き、屋の字を書かずに、何處かへ出ていつた。仲々歸つて來ない。二三日の後ヒョッコリ歸つて來た。店主は驚いて尋ねて見ると、大和の吉野山へ行つて、櫻花の爛漫さを滿喫して來たといふことである。彼は大和といふ二字を書いた瞬間に、大和の吉野を思ひ出した。あゝ今頃は丁度櫻花の滿開の頃であらう。さう思ふと、屋の字を書き終つて、何程かの御禮を貰ふといふやうなことは眼中にない。直ちに吉野へ走つて、美しい櫻花を觀ずに居れぬといふ位に、彼の審美熱愛の精神が彼の全身を躍らせたのである。これは彼の逸話であつて、正確な事實ではないのであるが、大雅堂などには、何にかこれに類する事實があつたらうかと思はれる。黄熱病を研究し、自ら黄熱病の犧牲となつて學問のために一身を捧げた野口英世博士の如きも、一旦研究室で研究を始めると、時間も忘れ、食事も忘れ、研究即我、我即研究となり、全く自己一如となつてしまふのであつた。米國で勉强中、其の指導の先生は、常に博士の熱心さを嘆賞してゐたが、併し研究に沒頭して食事も忘れて居るのでは、其の健康が心配だといふので、時々同學のものに命じて、博士の實驗臺の上にパンの數片を置かせた。それが博士の目にとまつたら、自然に一片や二片を口に入れるであらうとの豫想からである。併し多くの場合、パンは寥びしく卓上に、其の儘に殘つて居り、博士は徹宵研究に沒頭し、翌朝四時[illegible]く一と休みをするといふ位、眞理熱愛の學者であつた。

四、ペスタロッチーの人間愛

教育界に於ても、教育熱愛の人に乏しくはない。今日は東西幾多の

ペスタロッチーを見るであらう。併し、偉人の跡を慕ひ、其の業績について味ふことは無益ではない。

ペスタロッチーは青年の頃より祖國の窮民を救濟向上せしめようとした熱心な社會改革運動者の一人であつた。曾ては相當の地位を與へるから政府の官吏と勸められたが、自分の使命は一先生として働くことであると決意して、これを斷つた。彼が自らノイホーフと名づけたる一小屋に住んで、妻のアンナと共に始めて農業を試みたのも、其の農業を通じて窮民を救濟しようとしたためである。貧兒の教育も人間愛の發現である。ブルグドルフを初め各所で展開せる新教育の試みは、教育の機會均等を目指し、人間に惠まれたる神性の開發充實、知情、意の圓滿なる調和的全人の教育を企圖せるものである。

教聖ペスタロッチーは實に愛の哲學の實踐者である。彼の人間愛が愛の哲學を生んだのである。理論的に愛の哲學を構成して、其の實踐に力めたのではなく、彼の人間熱愛の至情が必然的に愛の哲學となつたのである。彼は「隱者の夕暮」に於て、神の光は愛である。叡智である。親の心であると言つてゐるが、叡智も親の心も愛から生れるのである。子に對する母心は人間に於ける愛の最も純なものである。母子の間の純愛と妻の夫に對する敬愛と信頼の眞心は一家を救濟し、延いては一村を革新する。これが彼の名著「醉人の妻」に於ける女性ゲルツルードの性格である。あらゆる正義は愛の上に安らふ。自由も亦愛の上に憩ふ。純なる愛の子心は愛の上に安住する自由の眞の源泉である。純なる愛の親心は正義を行ひ自由を愛するに充分なるだけ高められたる政治力全體の源泉である。正義と自由を精神とする政治の根源も愛の力である。純なる親心である。そして彼の生涯は實

に神の子としての子心を以て神命神意を承順し聽從遵奉し、親心の慈愛を以て人間を救濟せる神の聖業其のものである。「凡べてを人の爲めに、自からのためには何にものもなし」といふ彼の記念碑の銘はまことに能く彼の一生を現はすものである。

八十餘年の彼の愛の生涯に於て、シュタンツに於ける戰災孤兒の教育は實に彼の人間愛の最高擧を示すものである。この六ヶ月の間に於て愛の血を注いだ彼の聖業は、彼に教育の可能なること、教育が人間を救濟し得ることの確信を體得せしめたのみではなく、世界人類に對して人間愛的教育の重要性を惹ちしめた。彼の生涯からシュタンツの一幕を削り取つたならば、彼は唯た熱心なる新教育の實驗者位に評價されたであらう。彼の生涯を藝術化せるものもシュタンツに關するものが多く、殊に長田博士の持ち歸られたアンカーの筆になる「シュタンツに於けるペスタロッチーと孤兒」の作品やグロープの筆になる「シュタンツの孤兒とペスタロッチー」の作品など其の最も優なるものである。グロープの作品は、四十餘年前私は非常な苦心の結果、其の寫眞を入手し、神の子のやうに大切に日本へ持ち歸り、其の後長田博士の異常な熱心と苦心によつて、原色版が日本に持ち歸られ、玉川學園に於てこれを複製し、廣く教育界に頒布された。私もこれを書齋に掲げ、日夕拜むやうにして味つて居るのである。シュタンツに於ける彼の奮鬪努力の實狀は、彼が其の友人ゲスナーに與へた書簡によつて其の一端だけにても最も明かに知ることが出來る。次ぎに其の中の一部を記して見よう。

園兒は五十人から八十人許りに達した。助手としては、唯た一人の女性である。凡べてはペスタロッチー自身の手によりてなされたの

である。入學の時の子供等の狀態について、彼は次のやうに書いて居る。

此等の兒童の大部分は、彼等の入學當時には、人情を甚だしく輕視すれば、その結果一般に必ずさうならなければないやうな狀態に陷つてゐた。彼等が入學して來た時には、殆んど歩るけないほどに固着した疥癬をもつてゐるものもあり、潰れた頭をしてゐるものもあり、害虫をたからした襤褸を着てゐるものもあり、衰弱して骸骨のやうに痩せ、黄色く頬がこけ、苦悶に滿ちた眼をもち、疑惑と不安との皺くちやな額をしてゐるものもあり、あらゆる厚顔な横着や、强情や、僞善や、總ての詐欺に慣れてゐるものもあり、貧困に壓し潰されて忍耐强くはあるが、邪推深く、愛情なく、そして怯懦なるものもあつた。彼等の間には嘗ては安樂な境遇に生活してゐた甘やかされたものもゐた。此等の兒童はあらゆる要求をもち、互に一團となつてゐて、乞食の子供や貧しい家の子供などを輕蔑し、その新たな平等の取扱を喜ばず、彼等の現狀に應じて貧者として世話すること[illegible]は彼等の古き享樂には調和せず、從つて彼等の希望には通じない。一般に懶惰にして活動性なく、且つ精神的素質と、本質的な身體的技能との訓練が不足してゐた。彼等が學校で得た知識は餘りよくなかつた。十人の兒童の中に一人としてエイ、ビー、シーを知つてゐる者はなかつた。（長田博士モルフのペスタロッチー傳卷一）

園兒の大部分は實に身體的にも、精神的にもドン底に墮したものである。それにシュタンツ市民は新内閣の新憲法には贊成でなかつた。ペスタロッチーを目して彼等が嫌つてゐる政府に荷擔するものであると見て居り、また宗教上の反目もあつて、ペスタロッチーは實に敵地

に踏み込んで、敵の不幸なる子供等を世話するやうな立場に置かれた。子供を連れて來る片親の中には、子供がもはや物乞が出來なくなつたから、其の代りに金を、與れとねだるものもあつた。子供によい着物を着せてやると、翌朝子供を我が家へ連れ歸るものもあつた。

彼の苦心察すべきである。併し彼は「春の太陽が冬の硬直した大地を變へるやうに、速かに私の心は私の子供の狀態を變へるだらうと私は固く信じた」と言つて居るやうに、初めは人の物をもかつぱらつて食べようとする子供等の心に、慈愛や、情誼の德が芽生えて來た。

隣村が火災の厄に罹つた時のことである。ペスタロッチーは子供達を周圍に集めて言つた。「隣りの村は燒き盡された。家も、食物も、着物もない子供が百人も居るだらう。其の中二十人許りを此處に呼びよせて、私達と一緒に住むようにしようではないか。」子供等はこれを聞いて、異口同音に「しませう、しませう」と叫んだ。ペスタロッチーは更に子供達に考へしめた。「私達は今でも金は充分にないし、氣の毒な子供が私達の所へ來ても、政府は今より多くの金を下さるかどうか全くわからない。さうなると皆は今までよりもモットひどく働かねばならぬ。また着物を其の子供達に分け與へ、喰べ物も今より不足することになる。この事を能く考へて、皆の心が決まらなければ、不幸の子供達を呼ぶ譯に行かない。……」と說きかせて子供達の決心をたしかめた。子供達の心はこれを聞いて、却つて搖がないものとなつた。彼等は繰り返へした。「しませう、しませう。」彼等が此處へ來るためには私達は喜んでモット働き、少なく喰べ、そして着物も分けます」と答へて、ペスタロッチーを泣かした。

愛は愛を生む。ペスタロッチーの至愛は、野獸のやうな子供達に人

間愛を生んだのである。彼の至愛の奉仕はゲスナーに與へた書簡の中に生き〳〵として流れてゐる。

私の心は私の子供達に懸つて居り、彼等の幸福は私の幸福である。彼等の喜は私の喜びであるといふことを私の子供に朝早くから、夜遅くまであらゆる瞬間に私の顏の上に見、私の唇の上に感じさせた。私はたゞ一人、朝早くから夜遅くまで彼等のうちに居つた。彼等の身心によいものは何でも與へた。窮した時のあらゆる救助、あらゆる援助、彼等の得たあらゆる教訓は直接私から與へられた。私の手は彼等にあり、私の眼は彼等の目のうちに注がれた。私は彼等と共に泣き、彼等と共に笑つた。彼等は世界を忘れ、シュタンツを忘れた。彼等は私と共にあり、私は彼等と共にあつた。彼等の食べ物は私の食べ物であり、彼等の飲み物は私の飲み物であつた。私は何物も有ぬなかつた。周圍に家庭をもたず、友もなく、召使もなく、たゞ彼等だけを有つてゐた。彼等が達者の時は私は彼等のうちにあり、彼等が病氣の時は彼等の傍に居つた。私は彼等の眞ん中に眠り、夜は一番あとで床に就き、朝は一番早く起きた。私は床の中で彼等の眠るまで、尙ほ彼等と共に祈り、彼等に教へた。あらゆる瞬間、病氣傳染が倍加する危險に取り圍まれつゝ、彼等の着物や、身體の殆んと打ち克ち難い不潔を見てやつた。私は私の子供に對する、私の愛に就いての確信の單純な結果の上に基礎を置くべきでないやうな、如何なる秩序も方法も技術も知らなかつた。知らうともしなかつた。（長田博士著同上）

ペスタロッチは其至愛によつて子供と一體になつた。自然に子供の本質が明かになる。子供の神性は決して枯れてはゐなかつた。

それはペスタロッチヨの愛によつて芽生えて來た。近親のものが、ペスタロッチーに無體な行動をすれば、これを憤つた。時には泣き出すものさへあつた。子供の本質を其の內面から體認せるペスタロッチーは空虛な言葉の教育を詰め込むことをしなかつた。濫りに詰め込むことは彼には堪え得ざる苦痛であつた。それは子供の本質に反くからである。彼は自由とか平等とかいふ言葉を子供の前では言はなかつた。併し彼はこれを實行的直觀によつて悟らしめた。彼は子供等を互の分に應じて、あらゆる場合に於て、自分との自由な關係に置き、且つ彼等を氣樂にした。出來るだけ自由な空氣を呼吸させて束縛のないやうに注意した。子供等の眼光が朗らかとなり、陰氣な顏つきがなくなつて來た。彼の額の皺もてすりつぶした。斯くして自分も子供達も微笑み合ふことが出來るやうになつた。而も親の愛は幾人の子供に對しても平等に注がれる。彼は子供の個性に注意しながら、凡べての子供達に平等に愛を注いだ。彼は斯くして口で道義を致ゆる前に、先づその感情を目覺ました。こゝに子供の自發性が躍動して來るのである。知識の教育についても、直觀によりて子供を啓發し、興味をも起さしめ、自發的に事物に注意し、事物について考へ。自然に確實な記憶が出來、それが基となつて正確な判斷や、推理も可能となり、やがて次の段階へと進むことを要求するやうに導いた。

凡そ人間救濟、人間教化の事業に奉仕する人は、多くは皆ペスタロッチーのやうな人間愛の持主であり、而も現代に於ては病兒の取扱の如きは、進歩せる醫學や、衛生上の知識を應用し、ペスタロッチー以上の好成績を擧げつゝあるものと思ふのであるが、百五十年前に於て、世間より餘り注意されなかつた教化事業に對して、神人的な奉仕をなした彼

の聖業を思ふ時に、我々は敬虔の態度を以て、人類のために感謝せざるを得ないのである。或は彼の聖業は普通の人の及び難いもので、歴史的の藝術として味ふのみであると言ふ人があるかも分らない。藝術として味ふことも結構である。併し敬虔な態度を以て味ふべき聖なる作品である。彼自身は親が子のために苦しんで奉仕しても、それを苦痛と感じないやうに、全魂を、全身心を園兒に捧げ、如何なる苦痛も苦痛と思はず、骨と皮ばかりの痩せた子供達を肉つきのよい、血色の美しい健康兒となし、水準以下の性格を人並以上に高め、而も彼自らは血を吐く程の疲勞、困憊に陷り、遂にグルニーゲルの溫泉に於て暫らく休養せねばならなくなつた。併しこれは彼自ら引退したのではなく、佛兵が再びシュタンツに入つたので、孤兒院が一時閉鎖された爲めであつた。彼は、愛はそれがまことであり、且つ十字架を怖れない時に神の力をもつてゐると言つたが、彼の生涯はその精神を以て一貫された。そしてシュタンツに於て其の最高峯を見るのである。

五、ペスタロッチーと米國の教育

ペスタロッチーの愛の教育は、ナポレオンに撃破された獨逸復興の力となつたことは人の能く知る所である。フイヒテは「獨逸國民に告ぐ」の獅子吼に於てもペスタロッチーの精神を紹介せるが、それより十四年前に、卽ち千七百九十三年の十二月にフイヒテは瑞西の一寒村リヒテルスヰールに於てペスタロッチーと會見し、數日相共に語つたのである。多分フイヒテはペスタロッチーの著書として彼に世間的な名聲を得せしめたリーンハルトとゲルトルートによりて彼を知り、態態訪問したものと思はれる。幼稚園の創設者として、また「人間の教育」

の著者として、世界的な偉業を殘せるフレーベルも、瑞西に於てペスタロッチーの指導を受けたのである。フレーベルが兒童の神性を開發し、充實しようと力めたのもペスタロッチー精神の延長である。

又民主國の米國の國民教育もペスタロッチーからの影響を多分に受けて居る。米國は獨立戰爭の直後は經濟方面の復興整備に忙しかつたが、二十數年後には、其の方面も漸く整つて來たので、一國發展の基礎となるべき國民教育の革新を企圖した。色々の用務を帶びて歐洲へ派遣されたマクルーアはこの方面の使命をも託された。彼は歐洲に於ける新しい國民教育の權威者はペスタロッチーであることを確認し、千八百四年及五年に二度もペスタロッチーを瑞西のイヴエルドンに訪問し、ペスタロッチー自身の渡米を懇請した。ペスタロッチーは自分の學園をはなれることが出來ず、彼自身の渡米を斷つたが、彼の精神を體得して佛國で孤兒の教育に身を捧げてゐたネーフを推薦した。ネーフは獨逸がナポレオンに擊破された年、即ち千八百六年に米國のヒラデルヒヤに渡り、其處にペスタロッチー精神の教育を實施した。彼は其の後ロバート・オーエンの企圖せる理想鄕インデアナ州のニューハーモネーなどにも轉任したが、ペスタロッチー主義の教育は殊に北方ニューイングランド地方に深い根をおろした。これは米國の名高い教育行政官のホレース・マンや、學者で教育行政官をも勤めたヘンリー・バーナードなどの非常なる熱心によるものである。ヒラデルヒヤはクエーカーの信者ヰリアム・ペンの創設せるペンシルヱニヤ洲の首都であつて、希臘語で同胞愛といふ意味である。シルヱニアは古代伊太利語の森の神といふ意味から名付けられたもので、其の頭に英國王チヤールス二世の厚意により、ペン家のペンといふ字が加つて、ペ

ンシルエニアとなつたものである。ペスタロッチー精神の教育が、神の意志と一致して働く人々の安住の地となさんとした「同胞愛」といふヒラデルヒヤに於て最初に實現されたことはまことに意義深いことである。又ニューイングランド地方は清教徒の根據地である。清教徒は英國に於て壓迫を受け、和蘭へ移つて暫らく宗教上の自由を得たが、人の國の厄介になつてゐてはアングロサクソンとしての民族感が滿足出來ず、百二十名ほどの同志が、千六百二十年にニューイングランドのプリマウスに上陸し、こゝに米國に於ける精神主義の一大中心の基が開かれ、宗教的精神は米國の民主生活の重要な生命となつたのである。斯樣な精神主義の地方に於てペスタロッチーの教育精神が死後十年にして深く其の根をおろしたことは地下のペスタロッチーを微笑ましたことであらう。このホレース・マンの推薦によつて、ニューヨーク洲のオルバニーの模範師範學校長となつたページは、米國の教育史上最も著名な人であるが、彼の著書は明治九年に蘭人ファンカステールによりて日本語に譯され、彼日氏教授論として日本の教育界に紹介されたのであるが、我々は此の書物によりてペスタロッチーの教育に關する一端を知ることが出來たのである。

六、愛は教育の方法を生む

愛は教育の方法を生む。ペスタッチーの兒童愛は、空虛な言葉や、詰め込教授の殘忍なることに堪え得なかつた。兒童の本性に卽した直觀教授こそ彼の兒童愛より必然的に生れた新教育であつた。我が國に於ても愛の哲學者中根東里先生は其の弟の幼兒芳子を養育せる際に深くこのことを感じた。先生の弟は鎌倉に住んで行商をしてゐ

た。妻は死して自ら幼兒芳子を養育してゐたが、毎日行商に出かける場合には、隣家の老婆に芳子の世話を頼んだ。老婆は厄介者の世話を頼まれたので、芳子を殘酷に取り扱つた。當時下野にゐた東里先生はこれを氣の毒に思ひ、自分の手許に芳子を呼びよせて暫らくこれを世話した。芳子が稍〻長じてこれを親の許に送り歸へす場合に「新瓦」といふ題名で小冊子を書き挿繪なども画き、大きくなつたらこれを讀めといつて芳子に渡した。

先生は慈愛心に富んだ人である。下野あたりにては子供が三人あれば、その後に生れるものはこれを間引く惡習慣があつた。先生はこれを非常に嘆き、慈母抱子の圖を画き、其處に訓諭を書き觀音堂に掲げようとしたが、遂に果さなかつた。又芳子を育てる時には、自らこの幼兒を抱き寢して可愛がつてゐた。併し先生は自分の愛は芳子の親には及ばないと述懐してゐる。

我は汝の父の愛に及ばず、父と寢ぬる時は、寒夜衣薄きも汝は泣かず。我と共に寢ぬれば汝は啼く。汝の父は輾轉反側せず、汝が自ら動くを待つて然る後これに從ふ。我は則ち然らず。これを勉めて見ても困難なり。

汝の父は汝を怒らさず。汝、過あるや其の聲を勵まし、其の色を正して以て警む、又汝を叱れども慴れしむるに及ばず。汝に答して也痛に及ばず。これ汝を教ゆるなり。善く子を教ふるものは寛裕、溫柔これを施すや漸あり、細より大に至り、淺より深に入り、胎教に始まり、顧命に終る。我答すれば必ず痛まん我叱すれば必ず慴れん。故に我はこれをなさず。なさずと雖もなすと同じなり、我は汝の父の如く愛するを得ず。

幼兒に對する思ひやりなど實に切々なるものがある。先生は斯樣な兒童愛の鋭い感覺の持主であつたので「新瓦」に於いては隣家の老婆が芳子を殘酷に取り扱つた事實として、老婆は芳子を大人の言葉を使つて世話してゐたといふことを指摘してゐる。子を愛するものは自然に、事物の名其ものを教へずして、事物の貌又は聲などを以てこれを開喩するか、若くは重言するものである。手を手手、乳を乳乳、寢を寢寢、起きることを起き起きと重言す。又鼓を塡々と教へるのは其の聲を以て教へるのである。食を甘甘といふのは其の味を教へるのである。溺を津々と教へるのは溺の出る姿を以て教へるのである。然るに芳子は溺を津々と言はないで、大人の言葉を使つて小便と言ふが、それば殘忍な老嫗が芳子に教へたものである。先生のこの鋭い觀察は、幼兒に對しては事物の貌や聲で教へるといふ所謂直觀教授の必要を示唆するものである。而も子を愛する母親や父親は勿論のこと、苟くも幼兒を愛するものは、犬をいぬと言はずして、其の聲の直觀としてワンワンと教へ、猫をねこと言はずしてニヤーニヤーと教へるのが自然である。直觀的な教へ方は兒童愛から必然に自然に生まれて來る方法である。ペスタロッチーの直觀教育法も教育學的な理論の研究が先行したものではなく、全く其の兒童至愛の已むに已まれぬ發露であつて、理論的な說明は其の上に築かれたものである。

第四章　信としての眞實性

一、信は守るといふこと

信は人間の本性たる眞實性の最も基本的な具體的作用である。信としての働きがなければ、敬の作用も愛の作用も起ることが出來ない。敬愛の精神には其の基底に於て信の精神が豫想されねばならない。信といふ精神の作用がない場合には人間の眞實性は死滅と同樣である。

朱子は其の近思錄に於て守るを信と言ふと說いてゐる。言葉を守り言行一致することは固より信である。併しこの守るといふことを廣義に解すれば信の意味は一層徹底的となる。第一に人間の本性たる眞實性は自分を守らねばならない。眞實性が眞實性としての本質を充實し發揮し發展することが、眞實性を自ら守る所以である。人間が人間たる所以を守ることが人間の根本的な信の働きである。信は實に眞實性をして眞實性たらしめ、人間をして人間たらしむる根本の働きである。

事實を事實とすることは信である。それは事實を守るからである。眞理其のものは、眞實性の所產であるが、眞理への追究、眞理の創造、眞理の護持は眞理を守る所以であつて、眞理に對する信の作用である。眞實性は自分の信の作用によりて事實や眞理への途を開くのである。

二、論語三言—公民教育の根本精神

論語の顏淵第十二に於て、子貢は孔子に政をする道を尋ねる一節が

ある。孔子はこれに答へて、先づ以て人民に食物を十分に與へることであり、其の次ぎには國防上の兵備を整ふべきである。殊に大切なことは、國を治むる治者自ら身を修め、民から信じられてそむきはなれることのないやうにすることであると諭した。子貢は更に、この食と兵と信との三つの中で、已むを得ずして此の一つを缺かねばならぬ場合には先づ以て何にを缺くべきかと問ひ返した。孔子は斯樣な場合には先づ以て兵を去れ、兵備を撤廢せよと答へた。子貢はまた更に、然らば殘る所の食と信とで、已むを得ざる場合、何れを去るべきやと尋ねた。孔子は食を去れ、人間は死を免れないものであるから、食をすて去つて死んでもよい。併し信を去ることは出來ない。上下の間に信がなければ、たとへ食物があつても自立することが出來ない。信は捨て去つてはならぬと答へた。政治の要諦は爲政者と人民との間に信があることである。爲政者たる責任を盡し人民は人民としての責任を盡くし、各自其の本務を守り行ふ所に、信を以て結合することが出來る。

今や日本は新憲法に於て戰爭拋棄を中外に聲明し、平和國家の建設に邁進してゐる。完全に兵を去つたのである。而も食糧の不足に直面して居る。孔子をして言はしむれば、食する物がなくとも、信を失つてはならない。餓死しても人間の本質を守つて信を堅持せよと諭すことであらう。併し人間は身心一如一體である。御互が餓死したならば、信も生きた働きをすることが出來ない。元來、兵其のものも根本は信を以て立つべきであり、食其のものにも信といふ心の働きが必要である。食を生產するにも、これを賣買するにも、これを分配するにも、信が必要であり、これを受け取る消費者側に於ても、信といふ精神がな

ければならない。與へられた食糧を大切に守つてこれを粗末にせず感謝を以て攝取すべきである。食といふことを廣く經濟生活と解しても其の根本に於ては信が必要で、信のない所には經濟は成立することは出來ない。

民主政治に於ては、各自は自ら治むる者である。各自の意思に基づいて選ばれたる代表者が、政治の根本方針や、實施上の重要な問題を決定する。そして各自はこれを守つて實行する。大體に於ては、われわれは直接又は間接に色々の機關を通して其の意思を發表し決定し、決定したものを自分達が責任を以て實行に力むる所に民主政治の要諦がある。直接の爲政者は國民から信頼されねばならぬことは勿論であるが、國民各自も其の分に應じ、其の地位に應じて盡くすべき所を守るといふ信が、なければ民主政治の確立は困難である。斯くてわれわれは相互の人格を敬重し、信頼し、基本的人權を守り、また正義と秩序とを重んじ守つて世界の平和に貢献せねばならない。信は實に公民教育の根本精神である。

三、民主社會と信

社會に於ける各自の生活も信を以て結合されねばならない。信がなければ、各自は孤立的な個人に墮するより外はない。各自は人から信じられ、また人を信ずるやうな人格の持主でなければならぬ。孤立的な個人でなく、社會的個人としての責任を果たすだけの人格上の教養をもたねばならない。各自が各自の責任を守つて、これを盡くす所に信といふものが成立するのである。民主社會に於ては人を見たら泥棒と思へといふやうな市井の俚諺は禁物である。人を敬愛せざる

ものは、自分も人から敬愛されない。人を常に疑ひ人を信ずることの出來ないものは自分も人から信じられない。人を信じ、人からも信じられることは民主社會構成に取りて第一義的のものである。社會に於ては連帶的な協力が必要であるが、各自相互の間に信があつてこそ初めてこれが可能となるのである。

四、信念、信仰、自信、內面の秩序

信の形態は上下並に相互の間に見られるのみではない。仕事を爲す場合に、仕事を大切に守り育だて、仕事になりきるやうになればこゝに信念といふ力ともなるのである。又人間と絶對者との關係に於ても、我々が絶對者として景仰し、崇敬し、憧憬する場合には、こゝに宗教的の信仰となるのである。我々は絶對者の精神を守つて、これを體驗し、これが實行に力むる所に、この信仰の力があるのである。知能の方面に於ては、修練々磨の功を積み、自分に體驗的となり、自分の血や肉となつた場合には、自信といふ姿を以て現はれ來るのである。自信は卽ち自分の知能を守つて、これを益々立派にする力である。殊に信といふ働きがなければ、われわれの精神內面の秩序も立たず、全く渾沌たるものとなるより外はない。正しい自信や信念、信仰が確立する所に、知能に關する方面に於ても、其の他各方面に於て、苦難を克服し、突破して力强い實行や、創造が可能となるのである。

五、師弟の間の信

教育の第一義も先づ師弟間の信によつて成立する。教育者は被教育者より信じられるだけの人格的教養と、身心一如としての賴もしい

強健な體軀と、教授力の源泉としての豐富な正確な知能の持主であり、殊に夫れへの不斷の修行者でなければならない。子供や青年の自發心を促がし、其の研修を進めて行くには、教育者自ら自發的に全人的教養を深め、またこれを豐かになし、自發的に研究に沒頭せねばならない。自分を教育することが、人を教へる最善至上の方法である。自分が實行し得ず、實行の意思や實行の努力がないものを子供や青年に强いることは、それこそ惡意の封建的な態度である。生徒の信を失ふことが當然である。

我々は子供や青年を信じねばならない。彼等には必ず眞實性が潜んでゐる。神性が潜んでゐる。これを芽生しめ、これを啓發して、文化生活を營み、また文化生活を創造し得るまでの素地を啓培することが出來るとの堅い信念をもたねばならない。ペスタロッチーはシュタンツに於てこれを體驗した。我が國に於ては中江藤樹先生と大野了佐の關係が其の一例である。

先生の三十一歳の頃、大野了佐といふものが先生の門下生となつた。彼の父は立派な武士であつて、先生と親しい間柄である。了佐は其嫡子であるが、稟質極めて愚魯、鈍昧で、武士となる資格がない。父は何にか賤業を營ましめようとしたが、了佐は思ふ所があり、二十七歳で先生の門下に入つて醫學を修めた。先生の門下生には熊澤蕃山のやうな俊傑も居つたが、了佐のやうな鈍昧なものもゐたのである。先生は了佐の志を憐み、熱心にこれを教へた。醫書大成論の素讀を授けた場合には、二三句につき二百遍繰り返して復誦せしめた。了佐はこれを午前の十時より、午後の四時までかゝつて漸く覺へた。夕食後またこれを讀ましむるに既に忘れて居る。低能も甚しいものである。併し

先生は諄々として教へて倦むことなく、吾了佐に於て殆んど精根を盡くし了れりと言つて居る。先生はまた特に捷徑醫筌六卷を編して彼に授け、醫を學ぶ指針たらしめた。全部漢文で六百枚の書物である。

（藤樹先生全集卷四に採錄）先生は多忙の身を以て一書生の爲めに、而かも愚昧な一書生のために自ら其の教授書を編述してこれ教育したのである。了佐は遂に醫を以て世に立つことが出來、伊豫の宇和島領宮内村に住んで居り、七十七歳にして亡くなつた。了佐は愚昧ではあつたが、勉强心を失はなかつた。畢竟先生の至仁、至愛の賜物である。先生は了佐の愚昧の中に一道の光を認め、必ず相當の醫者になり得る素質があるものと信じ、この確信の下に至愛を注いで諄々とこれを教へたのである。（藤樹先生全集卷五）

信は信を發ふ。教育者が子供を信ずる時は、子供もまた其の先生を信ずる。濫りに子供を疑つてはならない。たゞへ子供に欺かれることがあつても、出來るだけこれを信じたいものである。其の中に子供の眞實性が目覺める。われわれにはこの忍耐が必要である。英國に於ける大教育家トーマス・アーノルドはラグビー校の校長として學生の風紀を一新し、所謂英國紳士の氣象を養ふ上に大きな貢獻をなした。彼の子のマシユウ・アーノルドも曾つては文政の方面にも力を盡くしたが、殊に英國に於ける文化評論家として名高いのである。トーマス・アーノルドがラグビー校の校長となつた時は、校内の風紀は亂れ、青年の性格品性も憂ふべきものがあつた。生徒は時々アーノルドに虛言を言つて欺くことがあつた。併しアーノルドは生徒の裏面に入つてこれを疑はずに、生徒の言ふことを語ることを正面より正直に受け入れたのである。其の中に生徒の方が自覺した。アーノルドにうそや

偽を言つても校長は何時も眞直にこれを信ずる。我々はこの後は校長を欺くことを止めようではないかと申し合はすやうになつた。アーノルドの眞實性よりの信の精神が、青年の眞實性を覺まして信の生活に進ましめたのである。

大阪の天六の勤勞學校に於ては、カード階級の子供達に特別な教育を施した。其の創設の當時は、校長はじめ先生は皆、悉く非常な決心であつた。皆んなはシュタンツに於けるペスタロッチーであつた。併し子供達は幾度か失望した。先生達は幾度か失望したが、決して教育的信念を失はなかつた。子供達が先生を信じない原因について色々研究して見たが、問題の解決は困難であつた。其の中に不圖したことから、一道の光明を得た。それは次のやうな出來事である。

隔日に子供を風呂に入れることになつてゐた。子供達の着物に虱がゐるので、先生達は子供と一緒に風呂に入る時には、自分の着物に子供の虱がつかぬやうに、子供達の着物より多少はなれた場所に脱衣したものである。そして一緒に風呂に入つて、子供達の垢などを洗ひおとしてやつてゐたが、子供達はこれを心から感謝してはゐなかつた。先生が子供達の虱を怖れるといふことが、先生と子供達の間に垣を作つてゐたのである。子供はこのために、心から先生を信ずる譯にいたらなかつた。この事が或る時、子供達の聲として先生に傳はつて來た。先生達は今更のやうに反省した。自分達は子供を信じて居る積りであつたが、未だそれは本物ではなかつた、眞實に子供を守つてはゐなかつた。心から子供を信じてゐなかつたことが氣付かれた。着物の虱を退治してやることも必要であるが、これを怖れることは間違であ

つた。先生達は其の後は子供の着物と同じ場所に脱衣した。子供の虱を貰ふことに決心した。虱の害虫が教育上の益虫となつた。子供は段々心から先生を信じるやうになつた。自然に先生を敬ふやうになつた。遂には先生に親しみ先生を愛慕するやうになつた。轉任しようとする先生を泣いて思ひ止まらせる程になつた。これは私が先年學生と共に同校を見學し、生徒の父兄のドン底生活を慰問せる際に校長から直接に聞いた事實であり、一同思はず涙ぐんだのであつた。そして多數の卒業生は今では立派な人間として、立派な市民として各方面の仕事に貢献してゐるのである。師弟間の信や愛敬は實に民主社會の根本の精神を自然に體驗的に涵養するものである。

第五章　行としての眞實性

一、物心一如としての人間文化

行は、敬、愛、信の必然の結果である。愛は愛の實行に移り、敬は敬の實踐となり、信は信の實行に進まねば、眞實の敬、愛、信とは言はれない。また眞實の敬、愛、信は實行に移さねば滿足するものではない。愛は愛の實行により、敬は敬の實行により、信は信の實行によりて、益々敬、愛、信の精神が力強く、豊かに發展し、眞實性の充實發展も可能となるのである。人間の價値あるあらゆる一切の廣義の勞作の根底に於ては敬、愛、信の精神が流れてゐるべき筈である。或る程度の眞實性が發揮されて居るべき筈である。具體的な勞作は單に筋肉的のものではない。

また精神といつても單に空虛な心ではない。身心一體、物心一如が人間界の眞相である。物質文化と精神文化と二つに分けることは不合理である。宗教のやうな所謂深い精神文化に於ても、信仰といふことは絶對者の精神を守つて、これが實行に力ひることでなければならない。フレーベルが勞作なしの宗教は夢のやうなものであり、宗教なしの勞作は駄馬のやうなものであると言つたのは、これを廣義に解釋すれば、物心一如の眞理を道破したものである。

科學や技術を物質文化と稱し、宗教、道義、文藝などの方面を精神文化といふやうな狹義な解釋は本來不合理なものである。優秀なる科學や、技術の創造力の中には、敬虔な宗教心や、立派な道義心、または調和的な審美觀などが不知不識の間に力强く作用してゐる。殊に科學技術に於ては優秀なる智性の働きが必要であるが、この智性其のものは決して孤立的なものではない、人格全體からにじみ出でたものである。また所謂精神文化の方面に秀でた人を見ても、それは單に空虛な精神で終るものではない。

科學者ニュートンは平素濫りに神といふ言葉を言はなかつたが、偶ま神といふ言葉を發する場合には、暫らく眼を閉ぢて默禱したと言はれて居り、大哲カントはニュートンのこの敬虔な態度を讃嘆して居る。

支那などに於て多年、宗教の普及に力を盡くせる外國の宣教師の中には、科學や技術上の知能を有する人が少くはない。或は生物學上の豐富な知識を有する人もあるやうである。これ等は皆、宗教普及の實質的な指導力として物を言ふのである。我が國の昔の大宗教家などの中にも、世間の衆愚の中にありて、醫療其の他、厚生上の方面や、彫刻な

どの技術的方面に於て、卓越せるものも少くはない。

科學や技術が、直接に人間の實際生活に役立つことが多いので、自然此の方面の文化は物質文化などゝ呼ばれる一つの理由となつたものであらうと思ふが、所謂精神文化に於ても、直接、間接に人間の衣、食、住に關係のないものはないのである。社會の實際生活に關係のないものはないのである。從來宗教や道義などの教養を、人間の實際生活ときりはなして考へたことは非常な間違である。宗教は實際生活をする上に精神の上に安定、禪定を體驗せしめ、道義は、これなくしては社會的個人としての人間にはなれないために必要なのである。道義なしには衣、食、住の問題も適當に措置することが出來ないのである。物質文化と精神文化とを二つに分けて考へたことは、却つて宗教や道義を實際生活より分離して觀念的なものとなしてしまつたのである。文化は一つである。物質文化や精神文化などゝいふ二元的のものではない。唯だ物心一如としての人間文化あるのみである。

二、勞作と教養

從來教養と言へば、主に所謂精神文化を其の內容とする嫌があつたが、これも今後は大いに反省すべきである。教養には所謂精神文化も物質文化も必要である。物心一如としての人間文化が卽ち教養の內容であらねばならない。殊に或る程度の科學技術の如きは立派な教養の內容とならねばならない。

今日以後の日本に於ては或る程度の科學や技術に關する教養のないものは、實際生活に縁の遠い、フレーベルの所謂勞作なしの宗教は夢のやうであると言つたやうな、空虛な觀念的のものとなるより外はな

い。

戰災の御蔭で、多くの人は農業を覺えた。天恩、地德、人功の尊いことが體驗された、天、地、人の大和の必要が體驗された。勤勞が、物を生み人を育てることが體驗された。これは實に尊い教養である。音樂や藝術上の趣味の豊かさも貴重な教養である。併し自分で農耕を經驗して見れば、ミレーの落穗拾も、耕作後の夕方の祈りも、心の底から味はれる。酷熱を克服し、流汗、勤勞の眞中に、黑い雷雲を天の一角に認め、風を伴ふ小嵐の驟雨にたゝかれて、木陰に一息をつくやうな經驗の持主こそ、眞實にベートホーベンのシンホニーを腹の底から味ひ得る人である。私自身も七十二歳の老骨を農耕に捧げ、糞尿と一體となり、さゝやかながら、多少この境地を味ひ得たることを感謝して居る。日本の人の多くは音樂を聽くにも、藝術品に對する場合にも、戰前とは非常に違つた心境を感ずることであらう。趣味の方面に於ても勞作、勤勞よりの體驗の伴はないものは空虛に感ぜられ、體驗を伴ふものには趣味は眞實の生命となり、血となり肉となつて活躍して來るのである。我々は戰災の結果の一つの賜物として少くとも、空虛な觀念界より實質的な體驗生活に進むことが出來たのである。これは眞實性其のものゝ充實に一歩を進めたものであり、われわれはこゝにまた一道の希望の光明を見出だすのである。

三、民主社會と勞作

昔は士、農、工、商の階級があり、農、工、商のやうな勤勞者は低級者としていやしめられた。明治の革新によつて、國民平等となつたが、實際に於ては、勞作、勤勞といふものは充分に頭を擡げることは出來ない狀態に

置かれた。民主社會に於ては、人間性の本質たる眞實性が明朗に開放され、眞實性の要求としての物心一如の實行、實踐、勞作、勤勞が第一義的のものとなり、正々堂々として新日本建設の先驅をなすことになつた。獨立自營、自ら働かねば生きられない。生きようとするものは働かねばならない。人間として人間性の本質に卽する自由の生活を味ふためには、人間性の本質の要求に從つて働かねばならないのである。而も社會的個人としての立場に立ちて、相互の人格を尊重し、相互の勤勞を敬重し、協力、親和社會の實質的發展に力め、世界の平和に行的に具體的に貢献せねばならない。

第六章　敬、愛、信、行相互の關係

一、中江藤樹の敬愛と民主社會

敬は親に移り、愛となることも出來る。愛は敬を含み、凡べてを粗末にせぬやうにもなる。兩者は眞實性の二相で、其の根源は一つであり、互に融合して敬愛、愛敬として作用し來たる場合が多い。

中江藤樹先生は、太虛を以て宇宙の本體となし、而も宇宙は孝德其のものの、發展であるとして、孝德を以て宇宙の生成發展の原理となして居り、人倫の場合に於て孝德は愛敬の二字に包まれて居ると說いて居る。親を愛敬するのは孝行であり、二心なく君を愛敬するは忠であり、禮儀正しく臣下を愛敬するは仁であり、よく敎へて子を愛敬すること

とは慈と名く、和順にして兄を愛敬するのは悌と名く、善をせめて弟を愛敬するを惠と名く、正しき節を守りて夫を愛敬するは順であり、義を守りて妻を愛敬することは和であり、僞りなく朋友を愛敬することは信であると說き、愛敬は人倫實踐の全體であり、唯、其の對象によつて色色と德の名が變るのである。先生は愛はねんごろにしたしむ意であり、敬は上をうやまひ、下をかろしめあなどらざる義であると解して居る（翁問答）、卽ち敬は、主として上下の間に流れる精神と解してゐるが、私は前に說いたやうに、敬は上下の外、尙ほ人格平等の立場にある一般の社會人相互の間に殊に必要であると思ふのである。縱の關係の外に、橫の關係が重要であり、民主生活に於ては社會人相互の間の敬重、尊敬が必要である。此の場合、親疎の別もあり、直ちに愛の働が作用するといふことは普通には困難であらうが、敬も愛になるだけの可能性があることを認めなければならぬ。而も愛敬は單に人倫の間のみに作用するものではない。一切の文化價値は皆この敬愛、愛敬の精神を根源とするもので、この精神がなければ一切の文化價値は創造されない保持されない、又發展も不可能である。これは實に民主生活の確立、文化國家の建設の基本精神である。

二、信は治國の大本

愛敬は信によりて成立する。信のない所には敬も起らず、愛も起り得ない。信は人や物の本性を守る所以である。本性を守るといふことは義理に合致してこれを立派にすることである。朋友の間に信が必要であるといふことは、我も人も皆、眞實性の持主であり、御互にこれを守り育ててゝ立派なものにならねばならない。この心を互に盡く

し合ふことが即ち義理にかなつた信といふものである。斯くして御互に守り守られて行く信の境地を媒として、敬や愛の働きが芽生えて來る。人の人格を無視し、輕視し、人を濫りに疑ふ所の心境は、同時に自分の人格をも無視し、輕視し、疑ふものである。自分の教養の淺きを告白するものである。人の眞實性を汚がし、自己の眞實性に裏ぎるものである。人間の本性に反き義理にも反くものである。

信は人間相互の間のみの問題ではない。自然物や色々の事物について應對し、またはこれを研究するものが、其の物の本質に即してこれに應對し、またはこれを研究し、この本質を守つてこれを處理し、または此の本質を守りぬいて眞理を究明することは信の態度である。萬物の眞實性に即し、これを守つて其の充實發展に力むることが廣義の信である。信のない所には一切の文化價値の創造、維持、發展は不可能であり、社會の秩序は亂れ、一切は支離滅裂に終らざるを得ない。聖德太子の憲法十七條の中にも、信の重要性が說かれてあるが、信は實に治國の大本である。文化國家を建設する基本の精神として、其の最も根源的な、この信の教養を深めることが、教育、教化の上の最初の重要な任務であり、信の地盤に於て愛敬、敬愛の教養を充實すべきである。而も前にも詳細に說いたやうに、敬、愛、信は實行としての形體にまで進まねばならない。廣義の勞作とならねばならない。然らざれば人間の生活よりはなれて空虛な觀念として浮游するのみである。

第七章　敬虔の精神

一、廣瀨淡窓の敬天哲學と其の實踐

廣瀨淡窓先生は、豐後の日田の盆地に於て、青年の教育に從事すること約五十年、其の間、自ら三千餘名の子弟を養つた。教育の制度に關しては夙に民主的な考を表明し、當時の諸大名に警告する所があつた。先生は其の當時の諸大名や群臣達の弊習について六大弊習を指摘し、教育によりて、これを革新し、藩政の根本的刷新を促がしたのである。六大弊習とは何んであるか、第一は諸大名や群臣達は其の行儀、尊倨高大に過ぎる。第二は誇張、矜伐を力むる。第三は、諸事秘密閉固する。第四は門地の高下を論ずる。第五は先格に因循する。第六は、文盲、不

學なることである。これ等の弊習を除くには、大名の子供も、群臣の子供も、庶民の子弟も同一の學校に於て學ばしむることである。そして學業や、德行に應じて、其の席次を定むることである。明治の教育は四民平等の立場に立つて創設されたものであるが、これには淡窓先生の門弟長三洲が、先生の教育意見に基づいて立案せる新制教育の意見が、大きな力となつてゐるので、此の意味に於て淡窓先生は封建時代の階級的な教育から一歩を進めて、民主的教育制度を打ち立てた功勞者である。

先生の學問や修養、先生の青年教育の方面に於て、先生の生涯を貫く所の根本の精神は、實に敬虔の精神である。

先生にありては儒教の本義は敬天の二字を實行することである。宋儒は天を理と稱したが、先生は天の神明不可思議なる理の一字を

以つて盡されない。むしろ上帝として敬ふべきであるとして居る。萬物は何から生れたか、死して何處へ行くか、人間の壽命は誰れがこれを定めるかといふやうな問題は、人間の測知し得ないものであつて、古の聖人は仰觀俯察、宇宙の理を究め、宇宙蒼々の中に主宰者のあることを信じ、これを上帝として尊んでゐる。天は萬民、萬物を生み、萬民、萬物は其の子である。一家の中に於て、子供が多數居れば親たるものは、子供達の間が相愛、親和ならんことを望むものである。相害、不和は親の心ではない。天は實に其の子である所の萬民間の相愛、親和を望むものである。萬民、相互の平和、福祉は天の意思である。萬民相互の相生、相養は人道の善であつて天意である。相奪、相殺は惡であつて天意ではない。

天は萬物の父、地は萬物の母である。宇宙、洪荒の初めに、先づ天地が

ある。而して其の後に人と物とが生れた。そして萬物は皆天から神識を受け、地から其の形質を受け、人間と禽獸と異る所は其の形質の方面であつて、神識に於ては同じである。萬物は天の分身である。併し人間の神識は靈にして物の神識は頑である。これは形氣の然らしむる所である。神識は火のやうなものである。これを乾いた薪につければ燃えて明となるが、濕つた薪につければ燃えることが出來ずして暗となる。人間は乾いた薪のやうなもので、人間に賦與された神識は充實、發展して明となるが、濕つた薪に等しい人間以外の物に賦與された神識は充實發展の性質なく、暗の狀態、頑の狀態に止まるものである。人の性は善なりと言ふは、この神識が賦與されて居るからである。神識は、生死を超越して不滅のものである。盤の中に水を盛つて月影を映つす。盤は形にして水は氣であり、月は神識である。盤が破れ水

が潰へれば月影も消え去るが、月其のものには去來、增損はない。神識は衆理を具へ、物に應じて發するものである。視聽、言動皆神識の作用であるが、人間に於ける靈としての神識は、人性の善根であつて、其の充實發展によりて視聽、言動が正しく天意と合致することになる。

萬物は天恩、地德によりて生成、發展するのであるのに、何故に特に敬天を儒教の本義とするかといふに、先生の考では、天は主動的の地位にあるので、宇宙の主宰者であるから、これを尊崇敬畏するのである。これに順從、奉仕し、これを聽受するのである。併し一家にあつては父は子を教へ、母は子を養ふ。子が生れるや先づ母によりて養はれる。母はこれを抱き、これを負ひ、これに乳を呑ませ、食を與へ、着物を着せる。其の後、漸次父の教が始まるのである。固より母も子を養ふ中に自然に色々の教を施し母親の感化は偉大なるものであるが、初めは養ふとふことである。天地もこれに似て居るもので、母としての地は人間に形體を與へ、色々の地上の食物によつて、この形體を養ふものであり、父としての天は神識を賦與し、仁、義、禮、智などの性を以て神識を教へて行くのである。人間が單に地の惠みとしての形體的なものにのみ陷り聲、色、臭、味の欲を恣にして、仁、義、禮、智等によつてこれを適當に裁くことが出來なければ、これは地からの養を受けることのみを知つて、教を天から受けることを知らざるものである。母の養、地の養、其の恩は大であり、これに感謝せねばならぬが、父の教、天の教は主動的立場に居るので、天を尊崇し、畏敬することが大切であつて、先生は敬天の實踐に力めたのである。此故に先生の敬天には常に敬地の念も含まれて居るので、父母、天地の總代として父や天を尊崇、畏敬するのであつて、父の中には母の愛と親しみとがあり、天の中には地の愛と親しみとが含まれ

て居る。所謂獸性、欲情を無視するのではなく、其の養を適度に裁する所に地の德をも汚かさずに眞實の養たらしむるのである。先生の學塾成宣園の教育に於ても、規律其の他の塾風は相當に嚴正であつて、而も和氣靄々、父嚴、母愛、天威、地恩の融和を現出して居るのである。先生の敬虔心は實に道德的敬虔より進んで、一種の宗教的敬虔に達してゐたのである。

先生は更らに持敬と敬天との區別を說いて居る。

持敬の敬は齊整、嚴肅の意で、敬天の敬は尊崇、敬畏の意である。齊整、嚴肅といふことは、飯を喫するときは、心は飯上にあるべきであり、若し書中の義理などを考へるならば、齊整、嚴肅ではない。道を歩くときは心は道の上にあるべきであり、若し飯を喫することを考へるならば、それは齊整、嚴肅とは言はれない。唯、一心一向にすべきことを爲して、他事に心が散亂しないことが持敬と言ふものである。敬天の敬卽ち尊崇、敬畏といふことは如何なる意味であるか。天は高きにありと雖も、常に下界を昭覽し玉ふのであるから、一擧手、一投足の間も不敬であつてはならない。幽室、闇夜、無人の境と雖も、天の見玉はざる所がないのであるから片時も敬畏の心を忘れてはならない。人か苟くも敬天のことを體得するならば、善は勉めずして成り、惡は禁ぜずして去る。例へば鬼神に謁する場合には、われわれは敢へて邪陰を思はず、敢へて偸盜を思はず、これは思慮や勉强によるものではない。唯た敬畏するからである。持敬は己が心を以て己が身を持し、己が心を修むることであり、敬天は、天威によりて己が身を正し、己が心を修むることである。

持敬も一種の敬虔であるが、これは道德的敬虔であり、敬天は一種の宗教的敬虔と言つてよいと思ふ。敬天の義を知ることは困難ではないが、これを實行に移して體得することは容易にあらず。故に書について研究することも必要であるが、少しづつにても、日常の生活に於て實行に力むることが最も緊要である。先生の萬善簿は實に天意實踐の貴重な日錄であり、またその青年教育も天意實踐の聖業であつた。人は其の善根たる神識を天より惠まれたものであるから、この神性を粗末にしてはならない。これを啓培し、これを立派なものにせねばならない。教育は實に天意や天の命に奉仕するものである。

なほ特に注意すべきは、淡窓先生の天は、其の天意、天命に於ては支那と日本とで違ひのあることを指摘してゐることである。天は支那では易世、革命を許したが、日本ではこれを許さない。萬世一系は天意に

卽するものであると說いてゐる。

二、上杉鷹山の敬虔の精神

米澤藩主上杉鷹山公は德川時代に於ける名君の一人であつて、內村鑑三氏は日本に於ける代表者の一人として英文を以て海外に紹介してゐる。

公は明和四年十七歲にして家督を相續し、明和六年十九歲の時に米澤藩に入り、藩政革新の實際に當つたのであるが、其の當時の米澤藩は經濟、財政は破綻、人心荒廢のどん底に陷つてゐたのである。財政上の困窮の一例を擧げて見よう。鷹山公の養父重定公の夫人は、尾張藩主宗睦の妹で、父は尾張中納言宗勝である。この宗勝が、鷹山公が上杉家の家督を相續する六年前に逝去した。米澤藩では、大石源右衞門とい

ふ士を弔問の使者として派遣したのであるが、この一人の使者に、米澤から名古屋までの旅費を支給することが出來なかつたので、漸く江戸までの旅費を與へ、江戸から名古屋までの旅費は江戸屋敷で受取れといふことであつた。然るに江戸屋敷では、この旅費の支給は不可能であり、重臣達は、大石は江戸で病氣に罹つて名古屋まで行かれなくなつたと言つて御詫びをしようとした。當時の勘定頭の駒形茂左衛門は、それでは自分の責任上申譯がないと言ふので、自分の大小を質に入れ、其の金を大石の旅費として渡し、大石は漸く名古屋へ悔みに行くことが出來たといふことである。

十九歳の青年鷹山公は藩政刷新の大方針として先づ極度の節約を斷行し、それにより生じたる餘裕を以て、各種の產業を振興し、國防を充實し、殊に文教により藩政興隆の基本精神を養はんと力めたのである。熱慮斷行幾多の障碍を克服して遂に所期の目的を達したのである。それには其の師、細井平洲先生の輔導、少壯革新派の熱誠といふものが大きな力となつて居るのであるが、鷹山公の眞實性に對する庶民の信賴協力がなかつたならば、實績を擧ぐる譯には行かなかつたのである。

鷹山公の眞實性は如何なる形態を以て發揮されたのであらうか。一口に言はば、施政の方針を、公自ら實行、實踐したことである。藩主としての服食費は一年千五百兩であるが、公は世子時代の服食費二百九兩は据置き、これまで、五十餘人もあつた奥女中を九人に減じ、食事は一汁一菜、寒夜、時により甘酒を飲む位が特例であり、着物も生涯綿服を用ゐ、絹物を着用しなかつた。

寡人斷じてこの節儉を行ふ、或は奇矯事を好むと云ふ者なきに非

るべし。然れども是れ皆、國家の爲めなり、決して一身の爲めに非ず。故に寡人、儉を行ふの間にも、自ら無限の歡樂其間に溢然たるものあり

といひ、又

一の費用を省くは、文武の一藝を習ひ得たると同じく考へ、益々以て其節操を砥礪すべきなり

と言つてゐる。公は實に藩政革新の爲めには、第一に節約の必要を感じ、それを自分自ら實行せずに居れない、已むに已まれぬ眞實性の旺盛な人であつたのである。而も皆これ國のため、人民のためであると言つて居るのは、公が家督相續の其の日に、十七歳の青年でありながら、

受け繼ぎて國の司の身となれば
忘るまじきは民の父母

と詠じて居る所の親心の發揮に外ならない。

そして政治の實施に當りては、公は獨斷、獨善に陷らず、或は文書を以て、又は諸所に設けある上書箱への投書などによりて、廣く人民の聲を聽くことを力め、自分の言行の過ちをも忌憚なく注意して與れとまで言つて居る。民の親たる以上は子供の立場を重んじて、其の聲を聽くことが人情の自然であり、これも公が民の父母としての立場を守つたのである。

私は公の親心的な犧牲、奉仕の眞實性には、敬虔の精神が力强く潛んで居ると信ずるのである。

施政の方針を自分自ら實踐躬行的に實行すること、それ自身は一種の道德的な敬虔である。道義への奉仕であり、責任への奉仕であり、人民への奉仕である。節儉を行ふこと、それ自身は歡樂であると感じた

公の心境には、節約し得ること、歡樂の溢然たるものがあることに自然に感謝の情念も起らざるを得なかつたことゝ思ふ。而も公の敬虔は道德的敬虔に止まらずして、一種の宗教的敬虔にまで深められてゐたのである。公は明和四年四月に上杉家を相續し、其の年の八月に、密に使を遣はして米澤なる上杉家の祖神、春日神社に次のやうな誓詞を奉納してゐる。

一、文學壁書之通無二怠慢一相務可レ申候

一、武術同斷

一、民之父母之語家督之砌歌にも詠み候へば此事第一思惟可レ仕事

一、居レ上不レ驕則不レ危、又惠而不レ費と有之候語日夜相忘間敷候

一、言行不齊賞罰不レ正不順無禮無レ之樣愼可レ申候

右以來堅相守可レ申候若怠慢於レ仕者忽蒙二神罰一永可二家運盡一者也

仍如レ件

といふ五箇條であつて、姓名の下の華押の下には血判が押されてゐる。この誓詞奉納は當時に於ても、其の後に於ても、人に知られなかつたのであつて、九十五年後の慶應元年三月に學寮の失火より春日神社に延燒した爲め、神器を移さんとした際に、初めてこれが發見されたのである。この誓詞の奉納は人に見せるためでもなく、他に利用せんためでもなく、全く公の眞實性的な宗教的敬虔心の發露であると言つてよい。

公の上杉家祖神に對しての宗教的敬虔は單に祖神に止まるものではない。また其の親心的な道德的敬虔も大きな意味での宗教的敬虔と關聯をもつて居るのである。公はまた實に宇宙の主宰ともいふべき天を敬ふ情念に篤かつたのである。敬天といふ大きな宗教的敬虔

心に富んでゐるのである。公二十二歳の時領内村邑を十二に區分し、各郷村に教導出役を置き、所轄の村に出役して、專ら農業をすゝめ孝悌を敎へ、是非を諭すやうになしたが、其の敎導の心得の中に次のやうなことが書かれてある。

一、天道を敬ふことを敎へ申すべき事。

天道を敬ふと申すことは、天は則人倫の始め、鳥獸、草木、萬の物を產み育だて給ふ故、天地に事へ奉るを以て人の道とす。夫れ故に、天地の限なき御惠の心に從ひ、人々に對して情深く物、を憐むを以て心とす。日月の天下、國土を照らし四時の廻り廻りて萬の物を養ひ給ふ事、仰き貴むべき事に候、此の義を能く敎へたき事に候、但し人に天を敬ふことを敎へ候には先づ我が身、天道を敬ひて是を百姓に敎へたき事、

公は自分が天を敬ふのみではなく、廣く人民にもこの精神を養はんとしたものであり、先づ出役の役人に敬天の實行を促がしたのである。公の敬天の思想は公自らの敬虔の資性に基づくことゝ思ふが、其の師平洲先生の敎に負ふ所が多いと思ふ。平洲先生の嚶鳴館遺草の中に次のやうに說かれてある。

人君は一國臣民に天と戴かれ給ふからは、御身に天の如くの御德の無之候ては、君の位に目出度被爲居候事は不相成ことにて、常に御覽被遊候通り、聖經賢傳の上、古今人君の賢愚興亡歷然たる儀に御座候、さて天の如き御德と申すは、天は萬物の父母として、凡天地の間に有りとあらゆるもの天の惠をうけ給はぬ物は無之候。そのごとく一國萬民の天とならせ給へば、天の心を御心として、臣民の父母となり給はねばならぬが、人君の道にて御座候。

また先生は儉約の必要を說き、人君は先づこれを實行すべきであり、こゝに人の君としての仁德が立つと共に、これが卽ち天道への御奉公、御先祖樣への御孝行なりと諭して居る。青年時代より純眞篤行の鷹山公はこれ等の訓諭を服膺し、民の父母として、親心を以て政治の根本要義となし其の實行に力めたのである。畢竟この親心は萬物の父母としての天德を體認せるものであり、公の道德的敬虔の根源は天といふ絕對者を敬し、絕對者の意志に順從し、感謝奉仕の精神を盡くす所の一種の宗敎的敬虔に歸するものである。

三、文化人と敬虔の精神

絕對眞實としての絕對者はわれわれの親であり、父母である。これを守りこれを信じ、この意思を實行することに力むる所の敬虔心は親に對する子心の敬虔心である。日月には私燭なく、絕對者は公平に萬物を愛し、而も萬物化育の功を誇らず、其の子たる萬物の間に、人類の間に相愛、共榮の平和を現出しようとすることは親心としての慈愛、仁慈である。この親心を體認し、われわれも人に對し、物に對し、私心を去つた親心を注ぐときに、宗敎的な敬虔は親愛、仁慈の姿に移り、絕對者の意思に奉仕し、社會人相互の間、人類相互の間の福祉を增進し、社會國家の安寧と世界の平和を促進することになるのである。而も絕對者は無限、絕大、永遠である。絕對者の精神を體認するものは、偏狹、獨善の殼を破つて、寬容、博大、親和、協力の精神にも篤くなり、事業には比較的永遠性を吹き込むことも出來る。文化とは物や人に御互の精神が永く生きることであるが、文化に永遠性が吹き込まれるのも、この宗敎的體認の力に負ふ所が多いのである。ラフハエルのマドンナもミケランゼロ

のモーゼも單なる小手先の技術ではない。作品には藝術家の個性が發揮される。マドンナやモーゼに對し、作家の聖なる心情の流れなくしてはこれ等の世界的な作品が出來る筈はない。

カントの哲學は單なる知性の產物ではない。其の人格全體からにじみ出た知性の所產である。其の人格に於ては、彼が青年時代に受けた彼の鄉里に於ける信念派の散虔的な宗教的生活を無視することは出來ない。

化學や電氣工學の上に偉大な功績を殘した科學界の巨人ファラデーは幼少の頃から、日曜の朝は必ず教會へ行き、四十九歳の時には教會の長老に選ばれ、數年の間、信徒への說教に身を捧げたと言はれてゐる。彼の謙虛、敬虔の精神は科學研究の彼の全人格の中核となつてゐたのである。

カーネギーは英國の片田舍ダンハームラインに生れた。其の誕生の場所は間口も奧行も二三間といふ物置同樣の小屋の二階の小暗い一室の片隅である。一家の貧困の狀態察すべきである。米國事業界の巨人となるや、文化事業に對する大きな喜捨をなせることは人の知る所であるが、彼は其の故鄉ダンハームラインにも巨額の喜捨をなし同地の色々の社會的文化事業は其のために異彩を放つて居る。彼は故鄉の土が戀しく、故鄉よりの招きに應じて久しぶりで、誕生の地を訪れた。老若、男女の町民は心から彼を歡迎した。彼は今尙ほ昔の儘なる彼の誕生の家を拜んで通る時に、彼を迎へるための教會の鐘の音が彼の胸を打つた。彼は太い涙が地に落ちるのも氣づかずに、感激と敬虔の心に充ち、首を垂れて靜かに教會へと歩を運んだのであつた。私も先年、澤柳先生一行六人連れでこの町を訪れ、この誕生の家を見て教會

に入つて禮拜し、彼の寄贈による壁なる文化事業を觀察し、夕暮に町の長老に招かれ、ストーブの燒火の前で、追憶の情に浸つたのであるが、この日一日は實に敬虔の情念其のものであつた。

法華經に佛陀が常不輕菩薩となつて戒諭する一品がある。此の菩薩は人を見れば悉く之を禮拜し讃嘆する。自分はあなたがたを敬ふ。敢へて輕んずることはしない。あなたがたは聖業を修めて佛となることが出來るのであると言つて、人を遠方に見ても、直ちにそこへ近づいて禮拜、讃嘆した。人々の中には杖木や瓦石などを以て彼を打擲するものもあつたが、彼はこれと爭ふことなく、これをさけて猶ほ高聲で、自分はあなたがたを輕しめはしない。あなたがたはまさに佛となるであらうと言つて禮拜讃嘆する。畢竟この菩薩は人皆佛性を具有して居るので、これを輕しめてはならぬといふ敬虔な心持を發揮したものである。人は皆眞實性を有し絶對者の分身であると觀ずれば、これに對して敬虔の情が起るのは自然である。人格は冒すべからざる尊嚴を有するものであると信ずるならば、これに對して敬虔の情を表はすべきが自然である。而も自他共に絶對者の分身として兄弟、同胞である以上は、これに親愛、仁慈の情を寄せることも自然である。社會人として相互の人格に道德的な敬虔を捧ぐべきは勿論であるが、宗教的敬虔の情がこれと融合する場合には親愛、仁慈の豐かさ、溫かさが加はつて人格相互の接觸、結合は一層深いものとなることが出來る。

四、ペスタロッチーの人間愛と敬虔の精神

人間愛は特定な人に對する感覺的愛ではない。人間一般に對して、の自己奉仕である。如何なる人にでも自己を捧ぐる奉仕である。而

も、其の人が立派になる可能性があるからといふのではなく、其の人それ自體を愛するのである。ペスタロッチーの描いた「醉人の妻」のゲルトルードは、自分の夫リエンハルトが酒を飲まなくなるやうに改心する見込があるからと思つて、これを愛したのではない。自分の夫それ自體を愛すればこそ、酒を飲まないやうに改心させようと心を碎いたのである。母親は自分の子供が將來立派な人になるからといつてこれを愛するのではない。子供を愛せずに居れぬ至情があるので、これを立派な人に育だて上げようとするのである。殊に低能兒を愛し、白痴を愛し、貧兒や孤兒を愛し、不幸なるものを愛し、これを愛せずに居れぬといふ純眞な愛情は實に人間愛の貴いものである。ペスタロッチーのシュタンツ孤兒教育について見ても、彼は子供達が立派な人間になるから、これを愛したのではない。彼等を愛すればこそ、犧牲を犧牲と思はず、困苦を困苦と思はずして彼等のために奉仕したのである。

彼の生涯は實に人間愛を以て貫かれてゐる。七十九歳の時にイヴェルドンから鄕里のノイホーフへ歸つて隱退したが、この年の冬は例年にない寒さで貧乏な村人は高い値段の薪を買ふことも出來ず、寒さに凍へてゐた。ペスタロッチーは何にか薪の代用物はなからうかと頻りに考へたものらしい。彼は色々と考へた末に、家の土間の上に小石を澤山積み上げ、其の上に藁で編んだ蓆のやうなものを敷いたら屋内も暖くなり、薪の節約も出來ようと思つた。併し村人にこれを勸める前に自分が試して見る必要がある。そこで彼は毎日野外に出て、方々から小さな石を拾ひ集め、自分の家の地下室の窓の側に持ち運び、そこから地下室の中へ小石を放り込んだ。孫もこれを手傳つた。然るに其の頃は嚴冬の最中で八十歳の老軀にとりては相當の難業であつた

に相違ない。彼は遂にこのために發病した。二月には起つことが出來なくなり、この實驗の結果を見ずに亡くなつた。後の世の人はこれを「神聖なる小石の堆積」と稱して感謝し禮讃した。實にこの「神聖なる小石の堆積」は彼が人間愛の最後の表現であつた。哲人フイヒテが彼を讃美せるやうに「彼は瑞西の下層の民衆を救はんとして、人類全體の救主となつた」のである。而も彼の人間愛は彼の天性であつたが、彼の天性は神に奉仕せんとする敬虔其のものを中核となしてゐた。神の意思を體認し親心を以て人間に奉仕したのであつた。

子心を以て神の心を心となし、親心を以て人の心を心とする敬虔慈愛に充ちたる人間を教育する力として、彼は母親を見出たした。母性の教育力はペスタロッチーによりて最高峰的に認められた。「醉人の妻」ゲルトルードは其の代表的な女性である。「ゲルトルードは如何にして其の子を教ふるか」の著書、殊に其の第十三信と第十四信とは母性愛による教育書である。

五、ペスタロッチーの宗教教育

子供に於ける發達の順序から見れば、ペスタロッチーも說いてゐるやうに、先づ母子の間に道德的なるものが芽生え、それから稍長じて宗教的なるものが發芽するものであり、また發芽することに注意することが人間教育に必要である。次にペスタロッチーの「ゲルトルード」は如何にして其の子を教ふるか」の第十三信と第十四信に說いてある要點について述べて見よう。

神を敬愛し、神に感謝し、神に信賴し、神に從順であるといふ宗教的なるものが高められる前に、子供は先づ、人を敬愛し、人に感謝し、人に信賴

し、人に從順であることが自然である。彼の見る兄弟を敬愛せざるものは、其の見ざる天の父たる神を敬愛することは出來ない。人を敬愛し、人に感謝し、人に信頼し、人に從順であることは實に子供と其の母親との關係から出發するものである。

母親は子供を護り養ひ安らかにし悅ばせる。これは母親の已むに已まれぬ親心の自然である。斯くして子供の要求を充たし、子供に不愉快なものを遠ざけ、子供が自分で出來ない事は助力してやる。子供は母親の世話を受けて悅び、そこに自然に母に親しみ母を愛し慕ふといふ芽が內に開發されるのである。

子供は未だ見たことのないものが其の目の前に立つと、驚き怖れて泣き出す。母は子供を固く胸に抱きしめあやして泣きをしずめる。再び同じ見慣れぬものが現はれる。母はまた保護の腕に子供を抱いて笑ひかける、子供も漸くこの物に慣れて泣くことはない。母と同じく曇りのない眼で母の微笑に答へる。こゝに母に對する信頼の芽が內に開發される。母は子供が何にかを要求する時に搖籃に急いで行く、飢じい時は乳を與へ、渴いた時には何にかを飲ませる。子供は母の足音を聞くと泣くことをやめる。母を見ると手を延ばす。彼の要求は充たされる。愛といふことゝ充たされるといふことは子供には一つである。こゝに感謝の情が芽生えする。母によりて要求が充たされては自然に母を愛するやうになり、母から施し與へられては感謝となり、母から色々と配慮されては母を信頼することになるが、母に對する從順の前には辛抱といふことが必要である。子供は乳を飲む場合でも母が胸を開いてくれるまで辛抱して待たねばならない。母が抱きあげてくれるまでも少しは待たねばならない。この辛抱といふこと

が轉がて母に對する從順となるのである。而もこの母子の關係はまた次第に擴り行くものである。子供は母の敬愛するものを敬愛する。母の信ずるものを信ずる。母の感謝するものに感謝し、母の從順なるものに從順となる。

母子の間に自然に發芽するこれ等の從順と愛、感謝と信賴が融合するとこゝに最初の良心が芽生えてくる。愛してくれる母に向つて暴れることは不愉快であり正しくないといふさゝやかながら良心の聲が開發される。母は唯子供自身の爲めにのみ世にあるのではないといふやうな感じも芽生える。斯樣に母子の間の關係は初めは全く人間同志の道德的なるものである。

子供は稍長じて、自己を感じ始める、終日何時も母親を求むる必要がないやうな隙感が芽生える。ペスタロッチーはこの時が神の必要を感ぜしめる大切な時期であると說いてゐる。母は子に對し、御前はモー母が要らなくなる時に御前に必要となるのは神樣であるといふことを敎へねばならない。母がモー御前に幸福や歡びを與へることが出來なくなる時に、これを與へてくださるのは神樣である。母が御前を保護することが出來なくなる時に、御前を腕に抱いてくださるのは神樣であると子供に話しかける。おばろげにこれを聞く子供の胸には何にか神聖な存在が浪うち初める。遂には母と共に神の名を廻らぬ舌で呼ぶことになり、母への愛と信賴とが、神への歸依の芽生として擴がつて行く。子供が長ずるに從ひ、母は、太陽の中に、波立つ小河の中に、木の纖維の中に、花の美しさの中に、露の清さの中に、萬物を愛する神が遍在することを示す。子供の眼の光りの中にも、其の柔かな關節の中にも、其の無邪氣な口の音の中にも、子供自身の中にも神が遍在する

ことを示してゐる。斯くして、子供は神と世界と母とを一つにして異らぬ感情を以て包むことになる。子供はだん〳〵生長する。母は曾つては子供に世界を眺めつゝ神を示したが、今や母は子供が學ぶ圖画に於て、計算に於て、神を示し、あらゆる力に於て其の神を示す。子供は完全なる一語の發音、完全なる一直線の描画の中に、完全といふ高い法則があることにおぼろげながら氣付く時、これは實に神の姿を感ずるものである。この法則は神が完全なる如く完全なれといふ法則である。斯くして道德的なものと宗教的なるものゝ感情から芽生えて來る智恵は、遂がて眞實、完全、眞理への究明として發展する。而も子供が母親を要する時に、母親が病氣のため、子供に思ふやうに奉仕することが出來ない場合もある、子供には此の場合に母の快癒恢復によりて自分の要求も充たされることを感ずる。この感じが漸次に擴大して、自分は自分のみによりて完成するものではない。自分達の兄弟、同胞の完成によつて自分も完成するものであるといふことが分つてくる。こゝに人間愛の崇高なものが芽生えてくる。母は多くの子の中で病める子があれば進者な子を其の儘にして、病める子の回復の爲めに没頭する。これは母は母であるが故に、また母は子にとりては母であつて神の代りであるがために斯くせねばならぬのである。已むに已まれぬ自然である。斯樣な母子の關係の中に育つものは人間凡べてが兄弟同胞であり、分けても其の不幸な人、悲慘なる人のために、救ひの手を延ばすやうになるのが自然である。

ペスタロッチーの言ふやうに、發達の順序から見れば道德的なるものは宗教的なるものに先行する。そしてそれを契機に宗教的なるものが芽生えて發動する。遂がて宗教的なるものと、道德的なるものと

が融合して人格の中核となり、これから文化を生む所の知恵も芽生え、眞實性の充實、發展となり、社會人として、國民として、世界人類の一人として相愛、協力、共榮の平和な世界の建設に向ふやうになる。

六、學校に於ける敬虔心の涵養

宗教の信仰は各自の自由である。親の信仰であつても子にこれを強いてはならない。幼少の頃には子供は自然に親の信ずる人を信じ、親の信ずるものを信ずることが多いのであらうが、理性が發達するに從ひ、自分の判斷によつて信ずべきものと信ずべからざるものとを識別する。また其の識別は人格の獨立上大切なことである。併し道德的の敬虔心や宗教的の敬虔心といふものは、人間自然の發動としてこれに培ふことが教育的である。前者は社會生活の維持發達に必要であり、後者は絶對者永久者へのつながりを體認して、社會生活の上に、道德的敬虔の上に永久的な深い根付をするために望ましいことである。夫れはまた縁がて各自の自由なる判斷によつて思ひ〳〵の宗教的信仰を體得する地盤となるものである。そして此の道德的敬虔心も宗教的な敬虔心も共に家庭に於ける大きな教育上の問題であり、殊に宗教的敬虔心の啓培は學校よりも家庭や社會に於ける教化や雰圍氣が必要である。併し學校に於ても、教師の人格は勿論、理科の教育、藝術に關する教育、勤勞、作業其の他の教育に於て、色々の場合にこれを養ひ、これを示唆する機會が少くないと思ふ。青年の教育に於ても、既成宗教の研究、宗教哲學、大宗教家の傳記、宗教史殊に又大科學者の傳記、などの研究によりてもこの種の情操を涵養することが出來る。殊に將來人の母となる所の女性を教育する女學校などに於ては敬虔の情操を

養ふことに大きな注意が拂はれねばならない。

道德的敬虔心の啓培も其の出發點は家庭であるが、これは學校に於て大に力めねばならない問題である。自他人格の平等獨立、冒すべからざる人格の尊嚴に對しては、これに道德的敬虔の情を捧ぐべきは當然である。これは社會的な諸德の根源である。而もこれに宗教的な敬虔心が加はるならば、相互は豊かさ、溫かさの心情によりて結合される。

教養の深い立派な先生に對しては自らこれに信賴し、これを敬愛する。立派な先生は常に不言の裡に子供の敬虔心に培つて居るのである。佐藤一齋が不言は教の神なりと言つたことは味ふべきである。人の言論を謙かに傾聽し、價値ありと判斷せる場合には、これに對して相當の敬意を表すことなども、日常の生活に於て、自然に敬虔心に培ひつゝあるのである。學校に於ける討議の練習の如きに於ては、斯かる精神を養ふのに好適な機會が多い。一般に敬、愛、信行の心が篤く働く場合には、自然に敬虔心も培はれるのである。

第八章　自然と文化

一、自然の文化的意味付

文化は人間の眞實性の具體的開展である。眞實性は文化の母體であるが、また文化によりて充實され發展することが出來る。而も文化の創造には時間と空間とが豫想されねばならない。歴史と社會とが豫想されねばならない。而も文化はまた新に歴史を作り、社會を文化的にする。

文化のない眞實性は單なる理念であり、空虛な人間性である。教育は文化に順應し文化を創造し文化の發展を力むる基本力を養ひ、社會人として、國民として、國際人としての本務を果たす所の人を育成するのである。

固より各の文化領域の中には、教育的作業が含まれてゐる。經濟界の中にも經濟發展についての教育があり、藝術界に於ても、宗教界に於ても、學術界に於ても、皆それ〳〵の教育がある。苟くも發展を企圖し、希望するものの間には必ず教育的作業が伴ふものであつて、教育は必ずしも一定の學校に限られるものではない。

文化の一面は人が自然に意味つけをすることであり、文化の他の面は人が人と交渉することから起るのであるが、人と人との交渉に於ても、常に自然を離れることは出來ないのである。

自然を意味づけ自然から價値を生み出だすといふことに於ては、色々の面が考へられる。自然科學は自然の理法に價値を見出さうとするものであり、技術はこの理法を應用して具體化する。そしてまた自

然科學の發達を促がす爲の主動的役目を演ずる、そして技術が工業化される場合には經濟生活の躍動が期待される。自然の調和の美を觀賞し、讃美して創作に綴り込むものは、自然の藝術的な意味付となる。自然といふものを人生と共に全體的に、考察し、宇宙觀、世界觀を理論的に研究することは自然を哲學的に意味付けるのである。

社會生活を合理化し、凡べての人に出來るだけ公正、均等の福祉を與へようとする社會科學的な研究などに於ても、社會の環境としての自然といふものについて大に研究せねばならない。自然の中に絶對者の自己顯現を體認し、敬虔の態度を以て自然を禮讃、愛慕することは自然を宗教的に意味付けるものである。カントは我が上なる星の輝く空と、我が内なる道德律の二つは考へれば考へる程、常に新たに感嘆と崇敬とを以て我が心を滿たすのである。而もこの二つのものは直接に我が存在の意識と結合すると言つた。カントは敬の態度は人間相互の間のものであつて、自然に對しては感嘆の態度であると言つて居るが、而も自然を自分の意識の中に結合し包藏し、自然なくしては意識もないのであるといふことを告白してゐる。内面的に非常に敬虔の精神に篤いケイニヒスブルクの雰圍氣の中に育つたカントは自然に對する敬虔の態度を感じないであらうか。自然に對する感嘆、讃美の中に敬虔といふ宗教的なるもののさゝやきを感ずることが、カントの心情の自然の動きであるやうにも思はれる。道德夫れ自體は人間相互の間の人倫であるが、自然に對してこれを道德的に意味づけることも可能である。風雨、寒暑は人間を鍛へて呉れる。人間を養ふ所の野菜や米の如きも風雨、寒暑にさらされて、夫れに順應し、それに抵抗して發育を遂げる。

奥竹は人間の素直な性格の譬へともなり、松は操守の例ともなることが出來る。併し道德生活それ自身は自然の色々の方面の意味付の働に於ける地盤として豫想されねばならぬものである。

二、必然と自由・有限と無限

自然も人間も絶對者を、母體とするものであつて、兩者の根元は同一である。併し兩者の性格には異るものがある。自然は因果律に支配され、人には自由意思が惠まれてゐる。自然は必然的であり、人間は自由である。宇宙全體から見れば必然と自由とが互に相補足して、萬物の生成發展が可能となるのである。自然は有限的で人間の精神は無限であるとも考へられる。併しこの有限と無限とが互に相補足する所に、萬物の生成發展が可能となるのである。而も人間に於ても、或る意味での必然がある。意識的な推理的合理の作用を經て、若くは本質的な合理によつて、人はどうしても或る一定の道理を實行し、其の一筋の途を歩まねばならぬやうな自道を突破することがある。また個人に於ける精神は必ずしも無限であるとは言はれない。自然について見れば、自然は人間によりて殆んど無限に意味づけられる。自然其の儘では單純な必然的のものでも、人間によりて意味つけられて無限自由の性格ともなることが出來る。最近の物理學の研究では、自然といふものはAから必ずBを結果するといふ單純な因果律を以て自然を律することは合理的ではない。AはBとなればCともなりDともなるといふやうに、自然に於ても一種の自由が考へられやうとしてゐる。要は自然と人間とは同一の父母から生れた兄弟であつて、人間が主動となつて、相互に補足し合ひ、御互が意味ある價値ある實存在とし

ての永久性を保つことが出來るのである。

三、文化と合理性の教育

自然の意味付から色々の文化の領域が發生し、其の深さが深められる。已に述べたやうに、科學技術や經濟の方面や、藝術的の文化や、宗教的なるものに關する文化など色々な意味の世界が發展して來る。而もこれ等の各方面の意味付に於ては意識的又は無意識的に自然の理法、法則といふ合理性、此の法則や理法に從ふといふ合理的態度が豫想されねばならない。法則のない所には調和の美も成り立ち得ない。莊嚴な理法の體認なくしては宗教的な敬虔心も起らない。藝術的意味付や宗教的意味付の場合には多くの場合に無意識に又は推理なしの直覺によりて法則や理法を感ずるのであらう。自然科學や技術的の意味付に於ては、此の合理的態度が正面に現はれ、自然の法則理法を研究し、これを活用して、人の實際生活に役立たしむることになるのである。「私は本書の冒頭に於て、宇宙の萬物は其の本然の姿に於ては正しく行動すると言つたが、正しく行動するといふことは、事物が其の本來の法則や理法に從ひ、これに一致して行動することである。即ち合理的に行動することである。民主的人格の重要なる內容である所の正義の實行といふことも、人間性社會生活國家の性格國際的道義などの本義に卽する合理的なる正しいものを實行することである。そして平素日常の生活に於て、國民として、社會人として、國際人として、人間として、出來るだけ正しく生活し、また夫れの努力といふことが正義的な生活の修練其のものである。こゝに眞實性の具體的なる顯現があり、充實發展があるのである。絕對者は其の絕對的眞實を自然と人間

とを通して、文化的に顯現し充實し發展し、社會も國家も合理的に、世界も合理的に展開し發展するのである。而もそれが爲めには各個人が合理的に正しく生活するやうに教養を積まねばならぬのである。

第九章　科學技術の教育

一、モズレーと米國の技術教育調査

新日本建設のためには、各方面に於ける自然の意味付が必要であり、文化の凡べての方面に新なる開拓が要望されるが、殊に科學技術の方面の文化の領域に於て、飛躍的な發展を遂げねばならない。國土は狹小となり、天然資源にも惠まれない日本は、逆に人口の激增を來たし、國民同胞の生活が不安に陷つて居る現狀である。科學は眞理の追求であり、直接に生活の安定を企圖するものではない。工藝に關する技術は性質上科學よりは直接に實際生活に關係を有するのであるが、この技術も單に實際生活に對する福利便宜の手段と見るべきではない。

この技術は技術の研究として夫れ自身目的としての發達が要望され、而も其の發達せる技術によりて、社會は改善され、實際生活が向上される。人は技術を生活の手段として使用するのみではなく、技術夫れ自身が目的として人の向上進歩を指導するやうな地位を技術に與ふべきである。學校の教育に於ても、國民學校では、殊に科學的な精神技術的な素地を養ふことが必要で、青年の教育に於ては一段高度に於て此の方面の發達を圖らねばならない。

今から約四十年前のことである。英國の實業家モスレー氏は米國に於ける技術上の教育の進歩せるに驚き、私財を投じて前後二回に亘り多數の視察員を米國に派遣して其の實狀を調査せしめた。私は留學生として英國より米國へ渡る際に、船中にてこの視察員の報告書を讀み大に得る所があつた。米國の學校視察中は此の方面に特に注意を拂つた。殆んど到る處の中等學校に於て手工作業場が設置されてあり、科學教育には必ず生徒自身の實驗室が立派に設備され、ワシントンの黑人中學などに於ては顯微鏡五十臺を備へ、生徒二人で一臺を使用し得る設備になつて居るのを見て驚いたのである。科學的な實驗的、實證的研究と具體的な技術上の作業と、又この二つの連關について、其の設備と實際の教育とに非常な力が注がれて居るのであつた。當時我が國の中學などに於ては、教師の講義實驗が主であつて、それとても不十分なものであり、生徒自ら實驗し實證する設備は殆んど見るべきものなく、一般に詰め込み的であつた。難解の電氣の理論を詰め込んでも、家庭に於てコードを修繕する簡易な技術さへも教へて居らなかつた。

二、デューイ教授と創造的勞作教育

其の當時デューイ教授は、米國に於ける科學技術の教育が英國を驚かす程進歩して居るにも拘らず、決してこれに滿足してはゐなかつた。米國の子供達は、家庭に於ては主として、消費の方面のみを見聞し、働くこと、創造することを見聞しない。彼は工場其の他で一生懸命に生產事業に勵んで居り、賃銀を貰つて家に歸る。家ではこの賃銀で、食物其の他を買ひ求める。子供達は全くこの消費の方面のみを見聞するのである。消費の興味のみが自然に養はれて、創造、生產、勤勞に對する興味は培培されない。これ等の子供達が米國の將來を擔當するのであるが、米國の將來は實に憂慮に堪えない。學校教育に於て是非この欠陷を補はねばならないといふので、シカゴ大學の附屬學校に於て勞作的な立體的教育を實行するに至つた。子供達には羊を飼育させ、羊毛をとり、羊毛の糸を作り、糸を染める。これを材料にして毛物を織るといふ作業を行ひ、科學的な技術的な、行程によりて生產、創造、勤勞の興味を培培することを力めた。其の他各教科の教授に於て勞作的な教育に重きを置き、行ふことによりて學ぶといふ教育上の革新を企圖した。其の頃は米國に於ては、小學校に於ても、手工作業等は相當盛んなものであつたが、デューイ教授にとりては決して十分とは思はれなかつたのである。其の當時の日本に於ては手工の如きは小學校の隨意科的のもので、未だ一般に正科として認められず、大都市の小學校で偶ま手工を教授すると、親の中には自分の子供を大工にするのではないと言つて、學校に抗議を申込むものさへあつたのである。

其の頃佛國のドモランが創設したヴェルナイユの新學校に於ては、

私が視察せる時に、丁度、物理の應用として生徒は大きなボートを造つて居つたので私も驚かされた。此の學校の母體である英國のアボッツホムルの新學校に於ては校長レッデーの創意によりて此の方面の教育が盛に行はれ、人文的教養に重きを置いた青年の教育に於ても、立體的な科學技術の勞作教育が、一般に注意されることになつた。都會地に於ては、既に多角的な科學技術方面の教育を主とする實際的な工藝學校が相當多數に創設され、其の成績も見るべきものがあつたが、一般の普通教育に於ては到底米國には及ばなかつたのである。モスレー報告書は此の方面に於て、英國の普通教育に多大の刺戟を與へたのである。當時の我が國の普通教育に於ける此の方面の欠陷は前述のやうなものであつて、我が國は此の方面に於て、實に米國よりも四十年以上もおくれたのである。

三、民主的人格と科學技術

民主社會に於ては、個人の自由が保證される。しかし個人の私利私欲を恣にしてもよいといふことではない。一般の社會の公安秩序の維持と文化の發展と福祉の增進と一致せねばならない所の自由である。これを妨げる所のものは自由とは言はれない。それは却つて社會生活に害を及ぼすものとして裁かれるのである。即ち自由其のものは、秩序や法則や道理に一致せねばならぬといふ必然性を包んでゐる。責任を內包せざるものは自由とは言はれない。責任は自由を自由ならしむる所の必然である。自由ならんが爲めには必然的に責任から離脫することは出來ない。自由は必然的な責任を豫想し、必然的な責任があつて初めて自由が得られるのである。自由と必然、自由と責

任との表裏一體の性格は、民主的な教育に於て、到る處に大きな注意を以て、涵養されねばならぬのであるが、わけても科學技術の教育に於ては、勞作的に體驗的に養はれ得るのである。科學技術の研究に於ける觀察、測定、實驗等の實證的行程に於ては資料の取捨選擇や、其の配置や取扱方などに於て常に自由と必然とが伴ふものである。自然の法則を知らない場合や、知つてゐても、不注意にも、恣意を以て措置する場合には必ず必然的に錯誤に陷らざるを得ないのである。これは所謂試行錯誤で、却つて教育的意義を發揮することもあるが、常道としては法則を知り、これに一致して措置すべきである。資料の選擇夫れ自身の みについて見ても、目的や法則に從つてA・Bの資料を取り、これに反くものを捨てることは選擇上の自由であるが、法則には從はねばならない、目的とは一致せねばならないといふことは一種の必然である。この「ねばならない」といふことを無視する場合には實證は成功するものではない。それは民主社會に於て、社會生活の目的や、人の人格尊重を無視し、社會の福祉に反するやうな無責任な行動をなすやうなものである。自由と責任の精神は公民教育や其の他の教授に於ても又一般の訓練に於ても隨所に涵養されるものであるが、單に思想的に觀念的に教ふるよりも科學技術などの教育の實際に即し、體驗的に啓培し、自然に涵養する方が、血ともなり肉ともなつて、民主的人格を實質的に作り上ぐることになるものである。

合理性の涵養には、單なる抽象的觀念の詰込は禁物である。科學も抽象的法則を發見するのであるが、それは事實に基づき、具體的な事物を通しての抽象である。われわれは物を考へる場合には出來るだけ事實に基づく必要がある。合理的となるには判斷といふことが大切で

あるが、この判斷も出來るだけ事實に基づかなければ誤れる判斷となることが多い。正確な判斷は出來るだけ事實に根據を置かねばならない。英國に於ける教育の長所の一つは判斷力を練ることであると言はれて居る。教材の多量を貪ることなく、出來るだけ子供の判斷に訴へて、教授を進めて行く、教授の進行は遲々としてゐても、一歩々々と正確に進行することが、英國の學授で見られる長所である。歴史の教授などに於ても史上の事實に基づき、子供を眞の史實の中の人たらしめて、斯かる情勢下に於ては、皆んな如何にこれを措置するか、斯かる情勢を何んと思ふかといふ風に問題を提出して、子供の判斷を促がすことや、それに基づく實際上の措置を考へしめる所に、歴史は單なる過去の史實ではなく、現在に生きて居る活史となるのである。其の他種々の教科に於て、判斷力を練る機會は多いのであるが、殊に科學技術に關する教育行程に於ては、事實に基づいて判斷をなし、この判斷によりて次の行程を進めることが必要なので、知らず識らず自然に正確な判斷力の練習となるのである。民主社會に於ては、各人の思想は自由であり、其の發表も自由であるので、各人は冷靜に沈着に、これを判斷する必要がある。徒らに激越な情緒に支配されることは自他の精神を混亂せしめ、自他の自由が妨害される。科學技術に關する教授や研究に於ては、突發的な矯激な情緒を克服し、私心を去つて冷靜沈着の態度をとらねばならない。

民主社會に於ては人格相互の敬重、各人相互の協力協同が必要である。科學的、技術的な方面の教育に於ては此の方面の精神も事實的に體驗的に啓培される。これ等の意味に於ても科學技術の教育は、民主的人格の教養上最も重要な役割を演ずるものである。

四、工作教授の刷新

學校に於ける理科的な學科は勿論、算數等に於ても技術方面にモット重さを置く必要があり、地理歴史等の學科に於ても、この方面に一層留意されねばならない。殊に手工、工作等の如きは他の學科と連絡を圖り、將來大に重んじられねばならない。工作に於ける基本の練習は固より必要であるが、衣、食、住の實際生活と密接な關係を保たしめること、が望ましい。運動場や校地の一角に動物飼育の小舎などを造らしむることは勿論であるが、子供の入り得るやうな小規模の家屋などを造らせ、其の資材の性質、産地、運輸等のことまで研究せしむるならば、そこには理科、地理などの知識も具體的に授くることが出來る。吉田松陰は塾生と共に教室增築の壁塗をなしたことも人の知る所である。學校新築の場合などに於ても、生徒をして手傳はしめ、自分の學校を自分で造るといふ精神を吹き込むことが望ましい。私の小學校時代に、校舎新築の際の地固めを手傳ひ大に愉快であつたことが思ひ出だされる。目下戰災地に於ては家屋の新築の工程が各所に見られるのであるが、これを見學し仔細に研究せしむるだけにても、道義的、公民的、地理的、理科的方面の教育が生き〳〵として具體的に施されるのであらう。

第十章　農耕的勤勞の教育

一、平和教育と農耕

尊德翁の報德は天地、人の德に報ゐる實踐的な德行である。翁は人間の本質たる至誠は神の如しといふことより一歩を進めて、至誠は卽ち神であると喝破した。至誠は自己內面の天ともいふべきもので、この內面の天を耕し、この至誠に徹することが修德の第一義である。人は其の本性に徹する所に、物の實相、理法も理解され、人の心も自分の懷に入つて來る。そして自分は天人一貫の心境を體驗することが出來る。翁が成田山に三週間の斷食參籠を試みたのも、この至誠に徹するためであつた。翁の內面は實に天恩、地德に對しての敬虔の精神に充

ちてゐたのである。敬虔の精神に篤くなければ、至誠其のもの、神性其のものが汚され、天人の本質が失はれる。この敬虔の精神に基づく所の農耕勤勞は實に天地の化育に合致するもので、こゝに天、地、人三才の大和的平和の世界が現はれる。

農耕は天恩、地德、人功の大和である。實に平和の象徵である。氣候順調、勤勉な人力、生き〳〵と伸びてゐる青田を眺めては何人も平和感に打たれる。平和國家の建設に努力せねばならない日本の教育に於ては、平和的教育といふ意味からも農耕を奬勵せねばならない。

衣、食、住といふ人間の生活問題、何れも皆生活上の必需品であるが、直接には食物が生命の生命である。これを生產する農耕は實に人間の生命の親であり、この生產が順調に行はれ、人々が公正に養はれて行く時に、人間相互の間に平和の空氣が自然に漂ふのである。農耕は實に

平和教育に欠くことの出來ない重要な勞作である。而も教育は社會生活の實際と結びつくことが必要であるが、農耕は實生活と最も直接な關係に立つものである。

文化は獨逸語ではクルツールであるが、この語源は拉典語のクルッスであつて、クルッスは耕すといふ意味である。農耕は實に文化の親である。農耕の勞作其のものは文化であり、收獲は實に立派な文化財である。これを自分の恣意によりて濫りに消費することを慎み、社會のために供出することは、二宮尊德先生の强調された推讓の德を實行するものであつて、このために人を生かし、また自分の生活も向上する。農耕は實に民主社會、文化國家の建設に欠くことの出來ない教育である。

禽獸は其の生命欲の滿足のために、本能的に、人の作つたものをも無斷で食ひ漁る。併し人は自分の勤勞によりて作つたものを食し、又は人の勤勞によつて作られたものは、これを買ひ取つて食する。これは作つた人の勤勞に對する敬意と感謝の現はれでなければならない。人の食物には必ず勤勞といふことが含まれてゐるのである。勤勞と勤勞を敬重することは實に禽獸と人間とを區別する大切な要素である。動物でも牛や馬のやうに人に代つて勤勞するものがあるが、これは自發的ではない、人から使役されるのである。自發的に勤勞するものは人間的な眞實性に惠まれて居る人間に限るのである。この意味に於て農耕の如きは實に人間教育に欠くことの出來ない重要な教育である。私はまきに或程度までの科學技術は人間の教養の內容として必要であると言つたが、或る程度までの農耕も人間の教養の內容として欠くことの出來ないものである。鋤鍬をもち、糞尿や其の他の肥

料などを取り扱ふ機會に惠まれない人は、多少の除外例は別として人格の全人的教養に於て不幸なる人と言はねばならない。

日本の將來の農耕には大に科學技術が應用されねばならない。農耕夫れ自身に合理性が多分に作用することが必用である。而も農耕の勤勞によつて、天恩、地德、人功に對する敬虔、感謝の心、正直、重厚、質實、根氣、忍耐、獨立、自營、謙虛、遜讓、隣人愛、協同、協力、など、民主社會、平和國家、文化國家建設のためのあらゆる道義が、體驗的に自然に養はれて行くのである。自然に血となり肉となるのである。外からの說敎の及ぶ所ではない。畢竟人間の眞實性といふものが發露する所に農耕の實績が擧り、われわれの敎養が充實されるのである。

二、尊德翁の「至誠と實行」

二宮尊德先生は、我が道は至誠と實行であると說き、次のやうに諭してゐる。

我が道は至誠と實行のみ。故に鳥、獸、虫、魚、草木にも皆及ぼすことが出來る。況んや人に於てをや。故に才智、辯舌を尊まず。才智、辯舌は、鳥、獸、草木を說くことは出來ぬ。鳥獸は心あり、或は欺くことが出來ると雖も、草木をば欺くことは出來ぬ。夫れ我が道は至誠と實行となるが故に、米、麥、蔬菜、瓜、茄子にても、蘭菊にても、皆これを繁榮せしめ得るのである。たとへ智謀、孔明を欺き、辯舌、蘇秦、張儀を欺くとも、辯舌を振つて草木を榮えしむることは出來なからう。故に才智辯舌を尊まず、至誠と實行を尊ぶのである。古語に「至誠神の如し」と云ふが、至誠は則ち神と云ふも、不可でない。凡そ世の中は、智ある者も、學ある者も、至誠と實行とにあらねば、事は成

らぬものと知るべきである。

先生は才智辯舌其のものを一概に排斥するのではない。至誠から湧出する才智辯舌もあれば、實行上の責任を果たす才智辯舌もある。至誠と實行を含む才智、辯舌は先生の精神と一致するものであると思ふ。今日學校で討議方法などが盛に行はれて居り、これに、先生のこの精神を誤解惡用して、討議方法を批難するやうなことがあつてはならない。討議は、子供ながらも、出來るだけ、事實に基づき、論理の正しい途を辿り、相互の人格を敬重し、人の說を正しく聽き、自說を正直に述べ、價値ある說に對しては敬意を表し、實行し得べきものは御互に實行を力めることを目指すもので眞實性の發露でなければならない。眞實性の發露としての眞理眞實を求むる討議は、これ尊德先生の至誠の發露である。

併し私がこゝに特に先生の說を引いたのは、農耕夫れ自體は眞實性の現はれでなければならぬ、先生の所謂至誠の發露でなければならぬといふ點を商唱せんためである。茄子やきうりに向つて如何に說敎しても彼等の發育には關係がない。說敎の代りに、無言で、肥料を施し、適當に培つてやり、親心を以て、はぐくんでやれば、彼等は正直にこれを受け入れて、その本然の性を氣持能く伸ばして行くのである。われわれの說敎は彼等には無意味であるが、彼の固有の本性を發揮させようとするわれわれの親心的な眞實性からの實行的な培養といふものが、彼等の生命に直接に培ふことになるのである。而もこのやうな眞實性の發露としての勤勞を繰り返す所の農耕によつて、われわれ自身の中に自然に重要な諸德が養はれて行くのである。

三、全人的教養と生産

科學や技術、工業方面などに於ては、自然物を破壞する作業もあるが、この場合でも自然物の構成要素を研究し、其の自然の法則に從つて作業が進められる。而もその自然法則は正確緻密なるものが多いのである。農業も亦土壤の性質と施肥の關係、寒暑風雨など氣候風土の自然の狀態を研究し、農具の使用、機械の活用などに於て自然の法則を守らねばならぬことは科學技術に於ける場合と同樣であるが、自然法則其のものが、科學技術の場合に比して時間的にも、空間的にも、左程に敏速逼迫的に感じられず、一般に餘裕があり、人力の自由が感じられる。科學技術の場合には、時間の問題でも一分一秒が大きな問題であり、自然に規律的になるが、農業の場合に於ては、左程深刻ではない。空間の關係でも科學技術に於ては餘程の不自由を感ずるが、大地を相手とする農耕に於ては、天地卽我といふやうな廣大さを感ずる。從つて半面に於ては、或は規律的に嚴正でないやうにも感じられる。併し勤勉な農業人は規律的である人である。規律的でない人には增產は覺束ない。先年デンマルクの農村國民高等學校や、農村の實際を視察したことがあつた。突然數戸の農家を訪問したのであるが、家の內外が美しく整頓してあるには敬服した。農村國民高等學校で訓練を受けた農村の人々の生活に、學校の訓練が生きて現はれて居るのである。一般に教養が豊かで深いといふことは、增產に大きな關係をもつといふことが如實に見聞されたのは愉快であつた。或る程度までの農耕夫れ自身は大切な教養であるが、農耕以外の教養內容をも包藏する豊かな全人としての教養は農耕を立派にすることにも必要である。

事變以來、國民學校は勿論、各階級、各種類の學校に於て、師弟一體となつて、農耕の勤勞に服したのであるが、これは主として上からの命令に基づいたものである。今は教育の本質から、人間性の本質から、自發的に再出發をなすべきである。

第十一章　消費の學校より生産勤勞の學校へ

一、民主社會と學校の自營

農耕や技術は一般に生産と關係し、人間の社會生活の實際と結びつくことが出來るのである。生産といふことから、經濟に關する教育も可能となり、また大に必要である。民主社會に於ては、濫りに人に依存し、隷屬することなしに、獨立自營の精神が必要である。學校自體も獨立自營の體形を作り、出來るだけの程度と範圍に於て、これを實行することが望ましい。從來の學校のやうに、一年に定額の豫算を貰ひ受け、それを經營上消費して行くといふ形態では、學校自體が依存的である。將來の學校は消費の學校の殼をぬぎ捨てゝ、生産勤勞の學校とな

ることが望ましい。農耕の方面について言はば、學校の學校林や耕地を大々的に擴張し、師弟協力して、生產勤勞に勵み、生產物を適正に販賣して、其の利益を學校經營の經費の一部に充當し、師弟一體となつて獨立自營的に學校を經營するといふ建前になることが望ましい。工作や技術の方面に於ても、或る程度までこれに類することも出來るだらうと思ふ。普通教育に於ても、これ等のことが相當に實行し得るやうに、課程を作らねばならない。專門學校や大學などに於ては、既にこれに類することが實施されて居る。其の最も著しいのは醫學部附屬の病院や、農學部の實習地などである。これは教授の研究と學生の實習といふ教育的設營であつて、精神的には獨立自營の訓練ともなることが出來るのである。施設の方面に相當の工夫をなし、若干の利益を得て、それが學校經營の費用の幾部分かでも補ふことが出來ればよいと思ふ。

二、生產勤勞精神の確立

併し學校が、生產により、勤勞によりて、相當の正しい利益を得るといふことは、一般には容易ならざる仕事で、俄かに實行することは困難であるであらう。要は學校自體を生產的なるもの、勤勞的なるものとなし、國民に自營創造の精神を養ふことが眼目であるから、必ずしも經濟上の利益を擧げる必要はない。現在の學校內部の施設によりて生產勤勞に力める外に、社會の實生活と連絡をとり、教師と生徒の能力の程度に應じて奉仕的に色々の生產勤勞を援助することも望ましい。そして生產すること、勤勞することによりて學び、學ぶことによりて生產し、勤勞するといふ生きた教育精神が學校の中に振起されて居ればよ

いのである。

フイヒテは、獨乙再建のために、次ぎのやうに叫んだ。小學校に於ては、食物、被服などに關するものは勿論、また能ふべくんば、道具類も學校で造られたものゝ外は使用せぬやうにありたい。こゝにて其の必要の物品が不足して他から補給を求むる場合には、其の補充はすべて現物にて供給し、それも彼等が日頃使用しつゝあると全く同じ種類のものを選び、而も生徒をして、その所有物が自然に增加したるかの如く思はしむることなく、寧ろこれを一種の負債として、一定期間內に再び償却せしむることである……。斯くて彼は、自己の生活を自己の勤勞に依らずして、他人の勤勞に依つて支へんとするやうなことは恥辱の甚しいものであることを悟らしめ、人間としての品位を保つやうな獨立自營の國民を要望したのである。學校は活物であらねばならない。

學校には生命がなければならない。學校自ら正しく生きるやうに生產的なること、勤勞的なることが、學徒をして正しく生きることを體驗的に敎養を積ましめる所以である。消費の學校より生產勤勞の學校へ轉回することが、再建日本の敎育の大任務である。

第十二章　自發心と興味

一、神の聲としての自發心

教育は其の本質上、價値あるもの、必要なるものに對して被教育者の自發性を促進し興味を振起せねばならない。詰め込や、無理押し付は教育ではない。

われわれは馬を水際まで導くことは出來る。併し馬が欲しない時に無理に水を呑ませることは出來ない。馬に水を呑うとする自發性が起れば獨りで水を呑むのである。自發性は本能として動物にも惠まれてゐる。併しそれは主として生命欲の滿足のためである。人間の眞實性は其の本質に於ては、眞實を求むる所の已むに已まれぬ自發

性の素質に惠まれてゐる。而もそれは單に生命欲の滿足のためのみではない。價値實現のための自發性を享有する。ルソーはこの自發性の中に神の聲としての良心の閃きを認めた。これは實に人間の眞實性の一大特色である。われわれは人よりの命令や壓迫によらずして、自ら進んで實踐する所の自發性をもつてゐる。命令に從つて行動する場合でも、これに氣持よく承順して自發的の態度を以て行動することが出來る。自ら創り出だす場合は明かに自發的であるが、外部から受容する場合に於ても、自發的な態度が起らない時には、眞にこれを受容することは出來ない。それは身につかないものとなる。子供が自學自習の形式をとる場合でも、內面的に自發的にならねば、眞の自學自習とはならないのである。机の前に行儀能く座つて、書物を見てゐても、心は他の方向に放心してゐることがある。子供にいくら勉强せ

よとすゝめても、自發的に自ら勉强するのでなければ其の効果は期待されない。

二、靈肉一元としての自發心

人の自發性は初めは乳を飲むことに現はれる。生命欲の滿足のための自發である。稍長じて遊戯の形として現はれてくる。親が命令しなくとも、子供は自然に自發的に遊ぶやうになる。親から褒められるために遊ぶのではない。何にか報酬を得るために遊ぶのではない。全く活動それ自身に滿足を感ずるのである。活動夫れ自身に滿足を感ずるといふ子供の遊戯の本質は成人になつても殘るものである。われわれが社會人として、私欲や報酬のために支配されずに、自發的に仕事其のものに興味を感じて、これに沒頭する姿は一種の自他一如的の美しい境地であつて、子供の遊戯の心境に類するものがあるのである。

生命欲や感性的の滿足のために起る自發性は生きんとするものの必然である。併しこれを適當に統制して價値的となし、更に高い價値生活への自發心を振起することが教育の任務である。われわれは生きねばならない。併し如何なる方向に、如何に生くべきかといふ價値問題を正しく措置する所に人間としての生き方があり、こゝに文化も生れてくるのである。動物は主として生命欲としての肉の生活である。絶對者は純なる聖なる靈の生活である。人間には肉と靈との交渉に基づいての文化生活が成立する。人間の眞實性的な靈の生活は肉を指導し、淨化し、價値化する。そして價値化された肉は靈に活力を供給する。斯樣な意味での靈肉一元としての人間が正しく、美しく、力

强く、敬虔な、眞實な人格となり、文化を創造し、體驗し其の發展に力むる所の文化的人格となることが出來るのである。

三、社會教育と國民の自發心

自發心は單に學校の教育の問題のみではない。それは人間一生の問題である。學校では人間の生涯に必要な自發心を養ふのである。殊に民主社會に於ては、自發的に仕事の完成に力めねばならない。他の强壓によつていやゝ〳〵ながら働くといふことは、自ら求めて惡意の封建的なものに墮することになる。

社會の教育教化に於ても、自發的に教養を遂げ得るやうな設營を完備することが必要である。大正十年、澤柳博士一行の一員となり、歐米教育を視察せる際に、われわれは、英、米、獨などに於ける成人教育の組織的な發達を視て敬服した。歸朝後、當局者に詳細に報告し、建言し、幸にして或る程度の實施を見るに至つたが、今日尙遠く英米などに及ばない。圖書館の設營の如きも、米國などゝは到底比較も出來ない程、貧弱なものである。シカゴのゲーリー町の圖書館などは、一般市民の自發的教養の機關であると共に、町の學校の子供の自發的教養のために使用され、圖書館の一室が學校の正規の教室に充當され、子供の自發的な自學自習の場所となり、將來社會人となつた場合にも、自發的に研究する精神を養ひつゝあるのである。

四、興味と合自然的教育

自發心は意識的に、若くは無意識的に、興味があるものに向ふことが自然である。興味ある場合には自然に自發心が起り、自發心のある所

には必ず興味が湧いて來て居る。自發と興味とは不可離の兄弟である。教育では價値あるものに興味が起るやうに指導すべきである。

カントは理性は興味によりて實踐的になると言つたが、ヘルバルドはこれに刺戟されて、教育學上、興味論を組織的に研究した。外界の事物に關する經驗の方面に於ては、經驗的、思辨的、審美的の三種の興味、人や神に關する方面に於ては、個人的同情、社會的、宗教的の三興味となし、多方的な六種の興味の重要性を說いてゐる。これは全人的教養を遂げるために大切な興味であつて、今日尙ほ敬重すべき興味論である。

デウーイは興味の發達の方面から見て、社會的、詮索的、構成的、美的表現の興味を擧げて居る。

乳兒は人をはなれては育たない。無心に母を求める。人なき所には寂びしさを感ずるのであらう。人は生まれながら社會的である。談話や相互の接觸を求める。社會的興味は將來、社會人として立つ上の素地をなすものである。民主的社會の人として、相互に奉仕を交換し、各自は全體のために、全體は各自のため、そして相互に協力、親和するやうに教育するには子供の社會的興味を啓培せねばならない。殊に合理性を重んずる民主社會の人としては、事物に關する詮索、構成、建設、組織等の興味を養ふことも非常に大切である。又これに調和的な美的表現が加はるならば、社會生活も一層豐かに潤があるやうになるであらう。調和の美も、美的な法則に從はねばならぬから其の中にも合理性が含まれてゐるのである。

發達上の大局から見れば、幼兒の時代には、社會的興味を豫想しての遊戲への興味が自發的に旺盛である。詩人シラーが說いてゐるやうに、獅子でさへ遊戲する。動物は飢へれば食を求むるための働きをな

し腹が充たされれば遊戯する。人間も幼兒としての體力、心力、に於て、相當に充實すれば、遊戯への興味が起る。初めは感覺的遊戯や運動遊戯に興味をもつ、これは多くは感性的、身體的である。次ぎに精神要素の多い想像的遊戯の興味が起る。總じて遊戯は靈的なるものと肉的なるものゝ兩方が含まれ、靈的なるものは肉的なもの感性的なものを生かしながら、これを淨化し純化するのである。人間生活の靈肉交渉が先づ遊戯の形として現はれ、物身一如、身心一體としての調和の姿がシラーをして遊戯の中に美の本質を認めしめた所以である。次いで七八歳頃よりは多少仕事の方面にも興味が起り、漸次目的に對して注意力も集注され、事物に關する按排、措置、配慮の興味も起り、詮索、構成の興味も活潑になるものである。青年期に入れば、漸次、價値的理念にも向ひ得るやうになるが、一面には自我意識も發達し、價値の選擇にも迷ひ、所謂嵐の時代でもある。正義感や、感激心に富み、同情心も厚くなり、職業に對する興味も起つてくるのであるが、宗教的敬虔心も目覺めてくる。教育ではこれ等自然の發達を考慮し、合自然的に其の興味に培ひ、文化價値に對する興味を養ふべきである。發達上の自然を考慮せざる場合には、自發心も起り難く、威壓的、支配的、詰込的となつて、教育の本道に反くことになる。幼兒には幼兒としての興味があり、兒童には兒童としての興味があり、青年には青年らしい興味がある。これ等自然の發達に應じ、幼兒を幼兒としての完全さに、兒童を兒童としての完全さに育だてねばならない。幼兒や兒童に大人の興味を押しつけて無理に詰め込むことは教育の本義ではない。幼兒を幼兒としての完全さに育だて上げれば、それは完成さるべき兒童期の教育の土臺となるのである。完成される兒童は、完成された幼兒から伸びるものであ

り、完成される青年は完成された兒童から伸びるものである。而も各時期を通じて一貫する興味は、眞實を求むる興味であり、又此の興味の啓培に力めねばならない。これは人間の眞實性に卽した根本的な合自然の教育である。人間は幼少の時代から、其の眞實性の發露として、愛すべきもの、敬ふべきもの、信ずべきものを直感する。正しいもの、正しからざるものを直感するものである。そして眞實なるものへ志向し、漸次これを實行に移す興味を起すものである。これは自尊心や興味に基づいて合自然的な教育を施す所の苗床とも見るべきものである。教師は決して完全な人間ではない。自己修養は生涯の課題である。師弟が一緒に眞實の世界へ進み行くことに努力するのが教育である。教師が子供を自分の不完全な型にはめようとすることは神の摯としての子供の自發心を汚がすものである。

第十三章　個性の教育

一、個性と眞實性

人間には他の生物とは違ふ所の特異性がある。これは人間的個性といふべきものである。併しまた、各個人にもそれ〳〵特異性がある。これは個人的個性といふべきものである。私はこゝでは、この個人的個性を問題とする。

人は其の顏が各自に異るやうに、其の性質に於ても萬人萬樣である。人間の各自の具體的なる個性は實に廣大無邊の宇宙間の一點と無限永遠の時間内の一瞬との交叉點に立てる唯一的一回的のものであつて、われわれは天上天下、唯一の獨自的個性的存在である。併し各

人の個性にも互に相類する近似的のものもあり、これ等の人は互に共鳴する所が深く、一團となつて協力的に活動して居る。教育家各自の個性には皆特異性があるが、そこにまた實業家などとは違ひ、教育家としての近似的なものがある。併し互に相當かけはなれた特異性を有し、甲が有するものを乙はもたない場合には、互に各自の欠乏するものを相補ふ必要を感じ、これ等のものが親しく接觸する。結局人間には眞實性といふ人間の本性があつて、姿や形を異にしても、常に眞實を求むる潜在的要求があるので、何等かの所縁によりて、互に相親しみ相結び、協力互助の生活を營むことになるのである。眞實性は人間各自を統一すると言つてもよいが、各自に個性があるので、この統一は生きて來るのである。個性の多樣を含まざる統一は死せるものである。眞實性は、自己の充實發展のために、萬種萬樣の無限の個性を通して百花繚亂的に開展し、こゝに豊富なる文化が發展するのである。個性は役に表面的な皮相な特異性ではない、人間性の本質である眞實性に根ざし、而も其の奥底に於ては絶對者の眞實性とも相交流することが出來るものである。この故に個性を尊重することは人間性を尊重し、絶對者に對して敬虔の情を捧ぐる所以である。

二、平洲及淡窓の個性教育

上杉鷹山公の補導役であつた細井平洲先生は、教育上、人には個性のあることを認め、個性を尊重すべき事を説いてゐる。

人を教へ候ても百人が百人一樣に不參もの、人心は各別なる事は不及申上候。孔夫子三千の弟子七十人の親炙弟子達も、人々心慮も別段所行も殊異にて、盡く一統には相見不申候。乍併聖人の德

化にて、何れも善良君子に被相成、大は大、小は小、それ〳〵に世界の用に立つ人ばかりと相見申候。塾人の御德にても御一樣に教へ立てられ候事は不相成ものかと可存候。併し人が善良に相成候處は一同に御座候（嚶鳴館遺草）

斯くて、先生は桃は桃、梅は梅、栗は栗、柿は柿となつてこそ人の食物となるのである。桃を強ひて梅にしようとしたり、梅を栗に育だてようとすることは、個性を無視して、何等の用にも立ち得ないものにするものであると戒め、教育はよろしく、農家が菜、大根を作るやうにせねばならぬと諭してゐる。菊好きの人が菊を作る場合には、花形が見事に揃ふ菊のみを咲かせ、枝をもぎとつたり、多くの蕾を摘み取り、伸びたる勢ひを縮め、自分の好み通りに咲く花のみを殘すのである。然るに農家にて、菜、大根を作る場合には、一本一株と雖も大切にする。菜、大根の中には上出來のものもあれば、勢ひのよくないものもあり、大小不揃である。併しこれ等を凡べて同樣に大切に育だて上げ、間引をなして、或は汁の實に、或はひたしとなして食用に供し、一本でも一株でも濫りにこれを捨てないのである。これが卽ち教育である。師長なるものは識度が狹少であつてはいけない。凡べての個性を包容して、其の固有のものを、それ〳〵伸ばして、其の分に應じて世のためになるやうにせねばならぬと說いて居る。

又廣瀨淡窓先生も、其の學塾咸宜園に於ては常に、塾生の個性に注意して居つたことは、「鋭きも鈍きも共に捨て難し、錐と槌とに使ひ分けなば」といふ其の自詠の歌を見ても明かである。又先生は四十九歲の時に、一時學塾の經營を弟の旭莊に讓つたのであるが、其の際旭莊に對する諭告の中にも次のやうに述べてゐる。

凡そ諸生の人品一樣ならず、才子あり、不才子あり、富生あり貧生あり、長者あり、幼者あり、勤者あり惰者あり、塾生あり外來生あり、其の人によりて其の望同じからず、その故に規約、課程の類を定むるに、彼に便なれば、これに不便なり、右に喜ぶ者あれば、左に怨む者あり。さても面倒なるものに候。

先生は學徒の個性と環境の相違差別を認め、一事を始め、一令を出すにも前後、左右を考へ、愼重にせねばならぬことを諭して居る。

三、個性の類型

子供にありては、初めは一般に、自分と自分の周圍の世界とは未だはつきり識別されず、主觀と客觀とは未開展の素朴な統一をなして居る。事物を見るにも、其の個々の部分を分析的に見ないで、素朴ながら其の全體を直感する。乳兒はその懷に抱かれ、母の顏を見詰めながら乳を吸ふ間に、自然に母の顏を覺えるのであるが、顏の中の鼻とか、口とか、眼とかを一ッ一ッ特別に分けて覺えるのではなく、母の顏を全體として覺えるのである。稍長じては、自分と自分の周圍の世界との差別も判り、主觀と客觀との相違も意識され、また客觀的の事物を其の部分部分について認識する能力も發達し、所謂開展せる多樣の發達段階となる。更らに進んでは事物の相互の關聯も分り、全體に關聯して部分的のものをも認識し、こゝに發展せる統一といふ狀態になるのである。これ等は大人より區別される幼年、少年、青年などの發展的な一般的個性とも見るべきであらう。而も何れの發展段階に於ても、彼等各自はそれぞれ他の者より區別される所の特異性をもつて居るのである。例へば心理的に、甲は視覺が鋭く、乙は聽覺が敏く、丙は筋肉の運動

に巧みであるといふやうに、視覺型、聽覺型、運動型などが考へられる。或はシュプランガーが文化的、價値的に類型を擧げてゐるやうに、個人的方面に關するものとして、理論型、審美型、經濟型、宗教型、の人があり、社會的方面への作用としては政治型や社會人型の人などがある。彼は道德は一般に共有であるから道德型といふものを別に立てなかつたのである。これ等の類型は主として成人に於て現はれるものであるが、青年期に於ては稍〻明瞭となり、兒童期に於ても、子供によりては、多少これ等の傾向を示すものもあると思はれる。

四、敬愛信行と個性

私は人間の本性としての眞實性が具體的に現はれる基本の相として、敬、愛、信、を擧げ、其の必然の結果としての行といふことを說いたのである。此の點から見れば、謹嚴莊重的な敬的の型の人もあり、慈愛に溢れる愛型の人もあり、凡べてのものを守り、人を信じ、人からも信じられるといふ信型の人もあり、常に實行、實踐に力むる行型の人もあるのである。例へば山鹿素行やフイヒテの如きは敬型で、ペスタロッチーや伊藤仁齋の如きは愛の型で、米國の教育行政官のホレースマンや英國のトーマス・アーノルド、日本の西鄕南洲翁の如きは信の型であり、實行の型であるとも見られる。又これ等の四相が平均して居る人もある。例へば廣瀨淡窓や細井平洲兩先生のやうな人はこの平均した性格のやうに思はれる。青年期は勿論、兒童期に於ても、これ等の傾向は既に多少現はれるやうに考へられる。ペスタロッチーの如きは、其の幼少の頃に、學校で地震に逢ひ、震動の繼續して居る最中に教室へ入つて、友達の書物を取り出したといふ逸話が殘つて居る。

五、學校に於ける個性教育

知能や社會精神上の方面に於て、大膽に個性を尊重して、これを教育的に實行したのはパーカスト夫人のドルトンプランである。先年私は澤柳博士の一行に加はり、長田博士などゝ共に第一次歐洲大戰後の歐米の教育を視察せる際に、ニューヨークに於て、兒童大學といふ名の學校のあることに氣づき、視察したのが、このドルトンプランの實行者パーカスト夫人の學校であつた。長田博士、澤柳博士も念入りに視察され、歸朝後、兼ねてこれに類する試みを實行してゐた澤柳博士の成城學園に於て、小原兄の努力により一段力をこめて此の方法を實施した。其の後小原兄の盡力にて同夫人を日本に迎へ、赤井米吉兄などの骨折によりて、夫人の著書も飜譯され、一時日本の教育界に一生面を開くに至つた。

其の後シカゴのキネチツカ學校長ワツシュバーン氏も日本に來り所謂キネチカ案なるものゝ紹介もあり、私も京都に於て同氏と談話を交換する機會を得た。此の案は各學年に於ける最低限の基礎學習に相當重きを置き、其の上に個性に應じて學習するといふことであつた。

一學級五六十人、六七十人といふ多くの子供を相手とする國民學校などに於ては、子供の個性を尊重するとしても、眞に個性的に適性教育を施し、尊重の實を示すことは決して容易でない。今日では唯だ出來るだけ努力するより外はない。或は個人的に、或は群的に、自由研究や討議法や、自學自習の時間や、自治訓練などを通して自發的に伸び〳〵と個性が伸びるやうに望まざるを得ない。殊に立體的な勞作、勤勞、作

業などに於ては、生徒の個性が能く現はれ、これを體驗的に啓培し指導する機會が多いことゝ思はれる。

第十四章　民主社會と自律的生活

一、衝動的生活

自律的生活となるには發達の過程がある。少くとも大體四つの階段があるやうに思はれる。

初期の階段は、衝動的生活である。衝動は自分の現在の單純な意欲を充たすための直接行動である。單純な內部の刺戟や感情が單純な外部の刺戟と相結合して行動として現はれて來るのである。選擇や決定の働のない、判斷、推理等の熟慮の働のない單純な直接行動である。

咽喉が渴くといふ生理上の刺戟と、不快の感情を內部に感ずる場合に、外部の刺戟としての水を目の前に見出たす。何等の熟慮も加へず

に直ちにこれを飲む。其のために渇は癒やされ不快感も去つて稍快感を感ず。生活の目的は達せられる。併し、この水は惡質のものであつて、これを飲んだ爲めに腹を痛め生活の目的に反することも起り得る。

本能は發達しないが、衝動的行動は發達し得るものである。人間にも種族保存の本能があり、これ等は昔も今も變りはない。夫れ自身發展はない。食べる働き、飲む働きも、働きそれ自身は人から教へられるものでもなく自己保存の本能である。本能はそれ自らは發展し得ないから、われわれ人間は理性によりて、これを統制するが、併し熟慮なしに水を飲んだり、物を食べたりする直接行動としての衝動には、發展性があるのである。即ちそれが熟慮的な行動となることが出來るのである。衝動は子供の生活にのみ限られるのではなく、成人の生活に於ても常に現はれて居る。われわれが、毎日歩き慣れた道路を歩くときは別に熟慮の必要もなく、實際熟慮もしないで衝動的に歩いて居るのである。併し夜間、知らない道を歩く場合には、足元に注意する。多少用心しながら、或る程度の熟慮をしながら歩を進める、これは衝動的な行動が意思的行動となつたのである。要は直接行動としての衝動生活は自分や人の生活目的に一致することもあるが、また逆に自分や人の生活目的を阻害することもあるのである。

家庭や幼稚園などに於ける幼兒の生活には衝動的行動が頗る多い。これを指導する必要が感じられる。多少の道理を教へて、將來道理の生活へ進展すべき素地を作ることは必要である。併し彼等には未だ熟慮の精神作用は幼稚であるから、濫りにくどくどしい說教をなさずに、模範を示し、實行によりて指導し、自然に道理に卽した生活をな

すやうな躾けに重きを置くべきである。赤ン坊に、時間を定めて、規則正しく、乳を與へれば、無言の中に、赤ン坊を、規律生活へと躾けることになる。衝動的行動の正しくないものを放任して置けば、氣儘が增長して民主社會に卽しない人間となる恐れがある。自由教育の本尊とも言はれるルソーのエミールに於ても、ルソーは躾について、大きな注意を拂つてゐる。ルソーは佛國の社會は氣儘な利己的の人々のために不幸に陷つたものと信じ、エミールの教育に於てはこの點について警告してゐるのである。例へば幼兒が、何にか欲しいとねだる場合に、それが正しくない要求であつたら、泣いても叫んでも與へてはならない。と說いてゐる。この場合幼兒にも、おぼろげながら、自分の要求は正しくなかつたと感ぜしむることが出來れば教育的であると思ふ。併し、躾を餘りに過重的に强行すればそれは躾とはならないで、却つて素直な順良性を失ひ、反抗的なひねくれ者を作ることになる。素直な明朗性、子供らしさを失はないやうに、內面の自發性がいつも廣い天地へ伸びて行くやうに適正に躾けたいものである。要は幼兒の頃は未だ內面の自由が十分に發達せず、從つて責任も極めて輕く、保護者、指導者側の責任が重いのである。

二、感性的生活

第二は感性的生活の階段である。國民學校の兒童の生活などは多分にこの階段に屬する。推理、判斷、選擇、決定、思惟、思考も漸次發達し、感情に於ても喜怒、哀樂などの情緖方面のみでなく、情操も段々深く篤く高くなり得る力を增して來つゝあるのであつて、全人的敎養の基礎を築く上に好適な時代である。併しまた、外部からの力や、內面の氣分、氣

質などにも支配され易く、其の決定も動もすれば永續性を欠き一時性のものも少くはない。從つてこの時期に於ては基礎的のものをしつかり練習するやうに自發と興味と必要とを喚起することが大切である。これが鑄がて創造力の土臺となり、自律生活の基礎を堅固に築き上ぐることになる。

この時期に於ては他人の決定に依存する場合も少くはなく、素直に受け入れる時代でもあるが、單に盲目的ではなく、他人の決定せることでも、これを自力で判斷し、正しいと思ふ場合にこれを受け容れるといふ自主的、能動的、自發的の態度に導かねばならない。殊に人間は幼少の時代から自己決定的な自律的生活の素質を有して居り、感性的生活の時期に於ては、これが一段發達して居るのであるから、兒童をして、自發的に自ら決定し、自ら解決するやうに指導するならば、人間の本性に合致し、其の發達にも照應する合自然的なものとなり、兒童は喜び勇んで益々自發的に活躍し、自律生活への途を明るく向上することになるのである。

兒童期は、大腦皮質の感覺中樞も發達し、事物其のものに對する感性的印象は强烈になるのであるから、出來るだけ具體的なるものに卽して感覺を練習することも合自然的であり。又聯想中樞も相當に發達してゐるから、自ら思惟し思考し、また情操的に品性を豊かにすることも合自然的の教育である。餘り詰め込まれて、自ら判斷をする餘裕がなく、潤のない枯渇した教育で情操的に觸れない場合には、事物の價値や必要を感ずることなく、自發心や興味も起らず、教育其のものに背を向け、先生嫌い、學校嫌いになり、學校卽生活、教育卽生活である所の教育からはなれることになるのは必然である。これこそ砂をかませる教